

風土記の丘地内遺跡発掘調査報告Ⅲ

—山代二子塚古墳—

92. 3

教育委員会

風土記の丘地内遺跡発掘調査報告Ⅷ

—山代二子塚古墳—

1992. 3

島根県教育委員会

例　　言

1. 本書は1990（平成2），1991（平成3）両年度に島根県教育委員会が国庫補助金を得て実施した，風土記の丘地内遺跡発掘調査事業（第8・9次）の調査報告書である。調査は，将来的な同地内遺跡の保護対策を立てるための基礎資料を得る目的で行った。

2. 調査は風土記の丘地内遺跡のうち，山代二子塚古墳（松江市山代町字二子塚，長石）の範囲を確認するための発掘調査を島根大学法文学部考古学研究室の協力を得て行った。

3. 調査組織は次のとおりである。

調査指導　山本　清（島根県文化財保護審議会会長），大塚初重（明治大学文学部教授），池田　満雄（島根県文化財保護審議委員会委員），三浦　清（島根大学教育学部教授）

事務局　泉　恒雄（2年度文化課長），日次理雄（3年度文化課長），藤原義光（課長補佐）
勝部　昭（同），野村純一（2年度文化係長），高橋　研（3年度文化係長），川原和人（文化財管理指導係長），田根裕美子（同嘱託）

調査員　渡辺貞幸（島根大学文学部教授），内田律雄（文化財管理指導係文化財保護主事）
鳥谷芳雄（同），丹羽野　裕（同係主事），糸賀幸宏（同），岡崎雄二郎（松江市教育委員会社会教育課文化係長）

調査参加者　北垣澄子，柳浦正子，水野一男，水野里江，横山久夫，植松一枝，角　克己，角　好江，角　陽子，永久恵美子，磯村賢司，原田敏照，守岡正司，勝瀬利栄，速藤直子，小川洋子，水口晶郎，神原博英，宮山健一，家塙英詞，勝部智明，江角久子，合田由美子，久米　基，増野晋次

遺物等整理　門脇卓子，岩田尚子，牛木千恵，松本恵理子，若本徳子，小林久恵，長野万喜子

調査協力　島根大学考古学研究室，島根県立八雲立つ風土記の丘，松江市教育委員会，大庭公民館，山代原自治会，岡崎屋木材㈱，岡徳産業㈱

4. 発掘調査に際しては，角　弘，角　正治，角　雍孝，永田勝義，犬山修身の各氏をはじめ地元の方々には終始多大な協力をいただいた。

5. 掃図中のX・Yは，国上調査法による第Ⅲ系X・Y軸である。したがって磁北より7°12'，真北より0°32'東の方向を示している。矢印（N）も同様な方位を示す。

6. 遺物の実測は，鳥谷，丹羽野のはか角田徳幸，湯村　功が行った。本調査で出土または採集した遺物，及びこれにかかる実測図・写真は，島根県教育委員会文化課で保管している。

7. 本書で使用した山代二子塚古墳測量図は，昭和55～56年に島根大学法文学部考古学研究室によって測量され昭和57年に作成された図面の一部を，平成2年の本発掘調査において実施した測量図を元に修正したものである。

8. 掃図中の土層の記載は，小山正忠，竹原秀雄『新版標準土色表』日本色研事業㈱（1976）によった。

9. 本書の編集は，調査員協議のうえ，鳥谷，丹羽野が行った。執筆は渡辺，川原，鳥谷，丹羽野が行い，文責は文末，目次に示した。

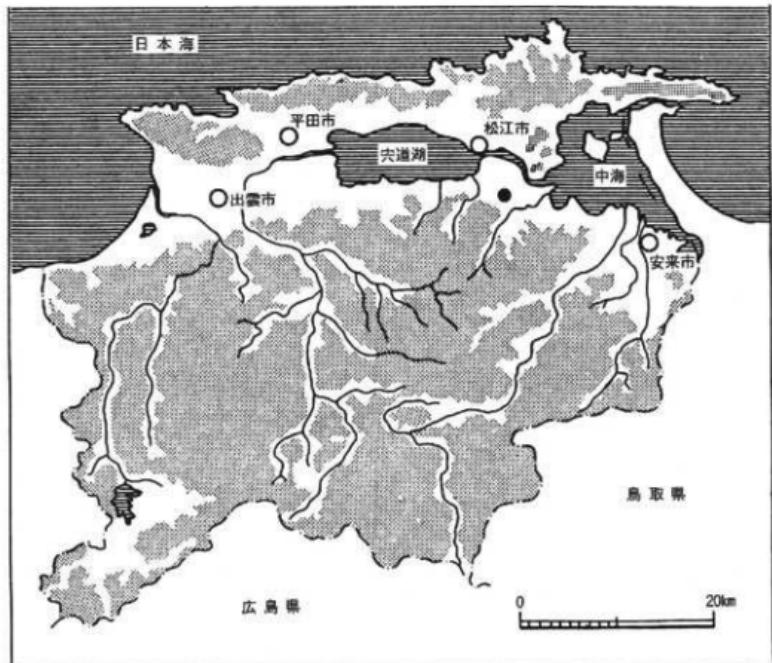
目 次

I 調査に至る経緯	(川 原)	1
II 位置と環境	(丹羽野)	2
III 山代二子塚古墳の研究略史	(渡 辺)	5
IV 調査区の設定と調査の経過	(鳥谷・丹羽野)	7
V 調査の結果		8
1. 後方部の調査		8
(1) 1トレンチ	(鳥 谷)	8
(2) 2トレンチ		10
(3) 3トレンチ		10
(4) 4トレンチ	(丹羽野)	13
2. 前方部の調査		14
(1) 6トレンチ	(丹羽野)	14
(2) 7トレンチ		19
(3) 8トレンチ		19
3. くびれ部(5トレンチ)の調査	(丹羽野)	20
4. 遺 物		23
(1) 墓 輪	(鳥谷・丹羽野)	23
(2) 須 恵 器		28
(3) その他の遺物		32
VI ま と め		34
1. 墳丘形態について	(渡 辺)	34
2. 出土遺物について	(鳥谷・丹羽野)	37

I 調査に至る経緯

八雲立つ風土記の丘は、松江市の東部に広がる意宇平野一帯を地内とするが、ここは古代出雲の政治文化の中心地で貴重な遺跡が数多く所在している。昭和47年度に開所した時点では出雲国庁跡、出雲国分寺跡、岡田山古墳、大草古墳群など代表的な遺跡、史跡の整備にとどまり、地内に含まれながらも未指定、未整備の重要な遺跡も少なくなかった。

そこで、引き続き整備を行うことを前提に昭和48年から出雲国分尼寺跡や岩屋後古墳の発掘調査を実施したが、本格的に整備を行うだけの遺構は検出されなかった。ところが、昭和53年～54年にかけての調査では「出雲国風土記」に記載されている山代郷正倉跡を発見し、その後国指定、土地買い上げ、整備を行って調査の目的を果たすこととなった。しかしながら、この調査期間中に正倉跡の遺跡範囲内で民間業者による宅地造成計画が発覚したことから、改めて、都市計画法で定めら



第1図 八雲立つ風土記の丘の位置(●印)

れている市街化区域の調査が急務となってきた。

そのような状況を踏まえ、昭和55年度から出雲国造館推定地、軍團推定地、四土寺跡等の調査を毎年行ってきたが、昭和60年、61年度を荒神谷遺跡から大量の青銅器が発見されたため調査を中断した。その後、团原古墳を調査し、併せて昭和55年度からは風土記の丘地内の地形測量図〔1/1000〕を作成してきた。このように昭和55年度から市街化区域で主要な遺跡が発見される可能性がある場所の調査を実施してきたが、平成元年度は、この調査が一段落したため「出雲國風土記」に神名種野と称された信仰の山で、中世には山城があった茶臼山の調査を行った。

この年、全長約90mを測る県下最大級の前方後方墳として大正13年に国の史跡に指定されている山代二子塚古墳の北側をはしる、市道山代矢田線が、新設中学校の開校にともない、現道を古墳側に拡幅する計画が起こった。山代二子塚古墳は、指定以来本格的な調査が行われていないため、その規模や構造については不明な点も少なくないが、鳥根大学考古学研究室の測量調査等により、指定地外に堀や外堤が広がっていることが推定されており、この道路計画が古墳の一部にかかるかどうか調査で確かめる必要が出てきた。また一方では山代二子塚の周辺には、大庭鶏塚、山代方墳、永久宅後古墳等からなる王陵の谷と呼ばれる「山代・大庭古墳群」があるが、この付近は近年民家が建ち並び、古墳の保存に支障をきたす状況になってきているので、早急に発掘調査を行って、保存、活用計画を立てることが必要となってきた。

このようなことから、「山代・大庭古墳群」の中心的存在である山代二子塚古墳を、平成2、3年度の2ヶ年計画で発掘調査を行うことになった。

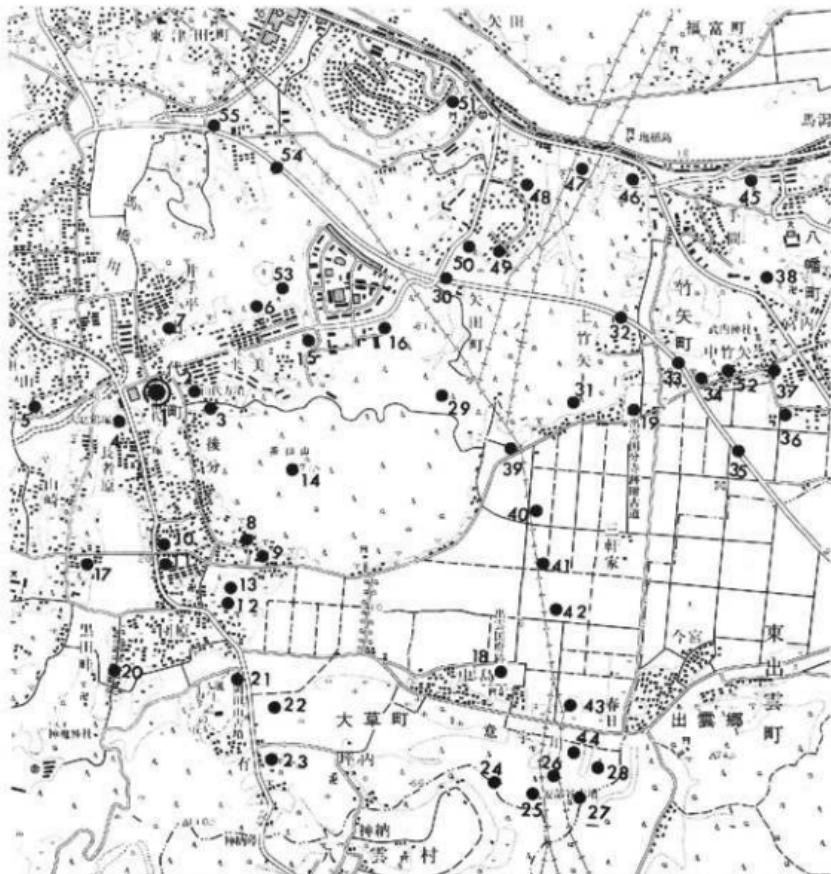
(川原和人)

II 位 置 と 環 境

山代二子塚古墳は、松江市南郊に独立してそびえる茶臼山（標高171.5m）の西裾に広がる乃木段丘と呼ばれるゆるやかな台地上に存する。古墳のすぐ西側には馬橋川が流れ、律令時代以降、國府、國分寺が置かれた意宇平野は、茶臼山をはさんで南東側に広がる。

生活に適した台地と、この地域有数の穀倉地帯たる平野に恵まれ、この周辺には数多くの遺跡が存在する。本古墳の向・台地上南側に存する下黒田遺跡では、旧石器時代と推定される剝片、石核などが出土し、また市場遺跡では細石核が出土している。

縄文時代、弥生時代の遺跡は、現在のところ茶臼山より東側の平野と丘陵を中心に分布している。縄文晩期の遺物や弥生後期の集落が検出された石台遺跡、弥生中期を中心とし土作関係遺物を出土した布田遺跡、弥生後期の玉作工房が検出された平所遺跡、水田跡が検出された大敷遺跡等が代表



- | | | | |
|------------|-------------|--------------|-------------|
| 1. 山代二子塚 | 15. 須谷横穴群 | 29. 畦田古墳 | 43. 大屋敷遺跡 |
| 2. 山代方墳 | 16. 十王免横穴群 | 30. 平所遺跡 | 44. 天溝谷遺跡 |
| 3. 永久宅後古墳 | 17. 東沼寺古墳 | 31. 上竹矢古墳群 | 45. 瀬山古墳 |
| 4. 大庭鶴塚 | 18. 出雲國守跡 | 32. 才ノ仲遺跡 | 46. 竹矢岩船古墳 |
| 5. 向山東古墳 | 19. 出雲國分寺跡 | 33. 中竹矢遺跡 | 47. 手間古墳 |
| 6. 来美廻寺 | 20. 黒田社土器遺跡 | 34. 國分寺瓦窯跡 | 48. 井ノ奥古墳群 |
| 7. 井手平山古墳群 | 21. 岡田山古墳群 | 35. 布田遺跡 | 49. 井ノ奥 4号墳 |
| 8. 市場遺跡 | 22. 岩屋後古墳 | 36. 宮内遺跡 | 50. 間内越塙丘墓群 |
| 9. 四王寺跡 | 23. 銅嶺山古墳 | 37. 平浜八幡宮前遺跡 | 51. 石屋古墳 |
| 10. 山代癪正古跡 | 24. 西百塙山古墳群 | 38. 邪接寺古墳群 | 52. 出雲國分尼寺跡 |
| 11. 下黒田遺跡 | 25. 東百塙山古墳群 | 39. 間内遺跡 | 53. 来美遺跡 |
| 12. 団原古墳 | 26. 古天神古墳 | 40. 上小畠遺跡 | 54. 勝負遺跡 |
| 13. 小無田遺跡 | 27. 大草岩舟古墳 | 41. 四配田遺跡 | 55. 石台遺跡 |
| 14. 茶臼山城跡 | 28. 安部谷古墳群 | 42. 神田遺跡 | |

第2図 山代二子塚古墳周辺の遺跡分布図 (1:25,000)

的なものであるが、これらの大部分は近年の開発で調査されたもので、茶臼山西麓の台地上でも今後多くの遺跡が発見されることと推測される。また本古墳から茶臼山北麓の谷を東にさかのぼった丘陵上には、米美墳丘墓、間内越墳丘墓群といった小形ながらも四隅突出型墳丘墓が築かれており、注目される。

さて山代二子塚古墳は、西側の大庭鶴塚古墳（一辺約42mの方墳）、東側に隣接する山代方墳（一辺約45mの方墳、周溝、外堤土壁、石棺式石室を持つ）、永久宅後古墳（整美で大形の石棺式石室を持つ）とともに、出雲地方最大級の山代・大庭古墳群を構成している。この古墳群はおよそ6世紀以降に築造されたものと推測され、前代と推定される大形古墳（たとえば手間古墳、上竹矢7号墳、廻田古墳、竹矢岩船古墳、石屋古墳など）は、すべて茶臼山より東の眺望のよい丘陵上に立地していることから、首長墓域の移動を想定する意見もある。また意宇平野の西縁丘陵には、岡田山1号墳、岩屋後古墳、御崎山古墳など小形ながら優秀な主体や副葬品を持つ古墳が知られる。

この山代・大庭古墳群の近辺には井手平山古墳群、向山東古墳群など、時期がさかのぼるか少なくとも同時期と推定される比較的小形の古墳が丘陵上に散在するのみで、百塚山古墳群、荒神谷後谷古墳群など群集墳が多く築造された大草町周辺の南側の地域とは対照をなす。一方本古墳の東側には、狐谷横穴群、十王免横穴群など大形の横穴墓群が築かれている。



第3図 山代二子塚古墳と周辺の古墳 (1 : 3,000)

律令時代以後もこの地域は出雲地方の中心として、数多くの遺跡が残されている。本古墳の近辺では、茶臼山の南北の麓にそれぞれ四王寺跡、来美庵寺が存し、『出雲國風土記』記載の山代郡新造院と推定されており、山代郡正倉跡も確認されている。

(丹羽野 裕)

注

- (1) 渡辺貞幸「山代・大庭古墳群と5・6世紀の出雲」『山陰考古学の諸問題』 山本清先生喜寿記念論文集刊行会編 1986

III 山代二子塚古墳の研究略史

(1)

山代二子塚古墳は「前方後方墳」という言葉が最初に用いられた古墳である。1925年、野津左馬之助は『島根県史』において、この古墳を「本県内に稀なる前方後方墳として著名なり」と紹介している。⁽¹⁾ この表現からすれば、すでにそれ以前からこの古墳に対して前方後方墳という認識があったのであろう。因みに史跡指定はその前年になされている。いずれにしてもこれは、栃木県において丸山丸全が上下車塚古墳を前方後方墳と呼んだのと並んで、前方後方墳の存在を学界に示した最初であった。そして、同書には本墳の略測図が添えられ、後方部背面が陸軍歩兵第63連隊設置の際に土取りされていること、自然丘陵を利用して盛土によって築かれていること、円筒埴輪がみられるが葺石は認められないことなど、基本的な観察が記されている。

本墳を前方後方墳とする野津の見解に対しては、前方後円墳の見誤りだとする後藤藏四郎の反論⁽²⁾があった。しかし、県が刊行した資料ではすべて前方後方墳として紹介されている。また後藤が本墳の重要性を説きつつ、もっと精密な実測図を作るべきだと指摘していることも忘れない。この課題は戦後、山本清によってなされることになる。なお、後藤は本墳の規模を30丈（約91m）と報告している。

(2)

1951年に山本は全国にさきがけて前方後方墳の問題を取り上げた記念碑的論文の中で、本墳の測量図を掲げて各部の規模を計測し、少なくとも後方部には周溝の痕跡が残っていると指摘するとともに、復元全長90mの出雲最大の古墳であることを明らかにした。⁽³⁾

その後各書に本墳の概要がふれられるようになるが、時期については一貫して中期古墳と考えら

⁽⁶⁾
れている。

山本は1968年に、改めて本墳のかなり詳しい紹介を行っている。⁽⁷⁾そこでは学史的意義にふれたのち、二段築成で周溝をもつことを述べ、各部の規模については前著の数値を多少修正して紹介した上で、全周に溝があったとすると溝を加えた全長は118m、その外側が土壘状に整えられていたと仮定すると総長120mを越えるものと推定するなど、新しい考察を加えている点が注目される。時期に関しては、「いわゆる中期型（この地方の他の例をも参照すれば中期後半）とみるのが常識的であろう。しかし……あるいは後期に属するものかもしれない。要は副葬品によらねばたしかな時期決定は困難である」と慎重な姿勢を示した。これを承けてか、70年代になると中期後半ないし後期前半とする論考も現れる。しかし、きちんとした根拠を提示した上で年代が論じられることはなかった。⁽⁸⁾

(3)

1980年から島根大学考古学研究室は、山代・大庭古墳群の再検討という課題のもとに出土座標と標高に基づく山代二子塚古墳周辺の新しい測量図の作成に着手した。その成果については詳細な報告⁽⁹⁾があるので繰り返さないが、この測量の結果、現況での復元全長は約92m、後方部の1辺は約55m、前方部端の幅は約55mと計測された。また、後方部東側の周溝痕跡のラインが墳丘主軸と必ずしも直交していないことやその東の土壘状高まりなどが注意されたが、これらは今回の発掘調査に委ねられた検討課題でもある。なお、今回の調査は、この測量成果を使用して実施したものである。

この測量報告の中で筆者は、それまで採集されていた埴輪や須恵器についても検討を加えたが、⁽¹⁰⁾その一つは川西宏幸による円筒埴輪研究であった。そして本墳採集の埴輪はいずれも川西編年Ⅴ期のものであることなどから、築造時期の上限を6世紀中葉と考え、本墳は明確に後期古墳であると主張した。川西Ⅴ期の上限については、その後の研究で5世紀末までさかのぼることが明らかになっているが、本墳を6世紀代の古墳とする考えは今日はほぼ定説化していると言えよう。また、出雲古代史の中での本墳の位置づけについても、筆者は後期初頭に東部出雲において政治的霸権を確立した大首長の墓という評価を提示しているが、今回の調査結果を含め今後の研究の前進の中でより活発な議論のなされることが期待される。

（渡辺貞幸）

註

- (1) 野津左馬之助「島根県内の古墳」『島根県史』4、1925
- (2) 丸山瓦全「下野國の前方後円墳」『考古学雑誌』15-5、1925
- (3) 後藤藏四郎「大庭村の二子塚」『島根評論』9-6、1932
同「大庭村の二子塚」『出雲歴史地理叢説』1932

- 同 「出雲国史跡史談の弁妄（七）」『大島根評論』20-3, 1943
- (4) 島根県『島根県下指定史跡名勝天然紀念物』1934
同『島根県史跡名勝天然紀念物並國宝概説』1938
- (5) 山本 清 「出雲国における方形墳と前方後方墳について」『島根大学論集（人文科学）』1, 1951
- (6) 三木文雄 「遺跡について—前方後方墳論—」『那須八幡塚』1957
後藤守一「古墳の編年研究」『古墳とその時代（一）』1958
山本 清「古代」『新修松江市誌』1962
大塚初重「前方後方墳序説」『明治大学人文科学研究所紀要』1, 1962
山本 清・池田満雄・近藤 正・東森市良「島根の文化財」3, 1963
池田満雄・大村雅夫・門脇俊彦・近藤 正「古墳文化の地域的特色—山陰」『日本の考古学』1966
山本 清「古代」『新修島根県史』通史篇1, 1968
- (7) 山本 清「古墳」『島根県文化財調査報告』4, 1968
- (8) このころ本墳の時期や性格についてふれた主な著作に次のようなものがある。
石塚尊俊・近藤 正「出雲文化財散歩」1973
池田満雄・東森市良「出雲の國」1973
前島己基「古墳にみる出雲の世界の展開」『歴史手帖』5-1, 1977
東森市良ほか『さんいん古代史の周辺〈中〉』1979
前島己基「古代の出雲—古墳の展開を中心に」『古代を考える』27, 1981
同「地域における編年—出雲」『季刊考古学』10, 1985
- (9) 渡辺貞幸「松江市山代二子塚古墳をめぐる諸問題」『山陰文化研究紀要』23, 1983
- (10) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2, 1978
- (11) 渡辺貞幸・内田律雄・曳野律夫・松木岩雄「出雲」『前方後円墳集成』中国四国編, 1991
- (12) 渡辺貞幸「山代・大庭古墳群と5・6世紀の出雲」『山陰考古学の諸問題』1986
同「古墳時代の出雲」『明日香風』22, 1987

IV 調査区の設定と調査の経過

古墳の状況 山代二子塚古墳は周囲の市街化が進む中、比較的保存状況の良い古墳と言える。墳丘は、後方部東側約1/3が陸軍により削り取られているものの、その他の部分の遺存状況は良好である。墳丘の東側には周溝と考えられる地形の落ち込みや外堤と考えられる土壠状の高まりが明確に観察される。墳丘北側においても同様の状況が見られるが、市道から外堤にかけて、重機によりかなり搅乱を受けている部分がある。墳丘南側と前方部北西コ--ナ--に接する付近は民家が建っているが、南側の一部には周溝らしき地形の落ち込みが見られる部分もある。

平成2年度調査 平成2年度の調査は、主として後方部北辺側と東辺側における周溝及び外堤帶の有無とその遺存状況の把握を目的に、墳丘主軸方位に対して直交または平行する計3本のトレントを設定して行った。トレント名は墳丘北側のものを1トレントとし、時計回りにその北東のものを2トレント、東辺側を3トレントと呼び、調査もこの順に行った。外堤側の調査、特に2トレント

その設定にあたっては、1トレンチ北側の地形の改変が著しく、これの延長線上で確保することが困難であったため、改変が少なく比較的旧地形を留めていると思われた東側の緩斜面に平行移動して行った。調査面積は1トレンチが52m²、2トレンチが25m²、3トレンチが42m²、合わせて119m²である。なおこれに先立ち、墳丘の北側周辺を竹木の伐採後、縮尺1/200、等高線25cm間隔で平板測量を実施した。本古墳の測量図は、既に鳥根大学法文学部考古学研究室（渡辺貞幸教授）により正確な図面が作成・発表されているが、この部分は当時も竹木が繁茂し、なお十分な測量ができなかつたとの事情から、今回これを補足する形で行ったものである。この結果は別添「山代二子塚古墳墳丘測量図」に示したとおりであるが、この図は基本的に前記研究室作成図に拠ったものである。

現地の作業日程は、8月1日から同7日まで竹木の伐採を行い、同6日から11日にかけて平板測量を実施した。発掘調査は、同20日から9月28日までの24日間を費やし、埋め戻しを行い終了した。

平成3年度調査 平成3年度の調査は、後方部の北東のコーナー部分の状況を確認するために4トレンチを、くびれ部の状況を調査するために5トレンチ（くびれ部トレンチ）を、前方部西側の振や外堤帯の状況確認のために北から6～8トレンチを設定した。4, 5, 6トレンチでは調査目的を果たすために当初のトレンチを拡張し、最終的に調査面積は4トレンチ48m²、5トレンチ35m²、6トレンチ42m²、7トレンチ7m²、8トレンチ22m²、合わせて154m²である。調査作業は、8月5日に開始、10月7日に埋め戻しまで完了した。

遺物整理作業は2年度、3年度とも現地調査終了後に継続して行い、平成3年度に2ヶ年の調査について報告書作成作業を行った。また2年度、3年度とも現地調査終了前に鳥根県文化財保護審議委員会会長・山本清、同委員・池田満雄、明治大学教授・大塚初重の3先生に指導いただいた。また地山の性質等、地質学的指導を鳥根大学教育学部教授・三浦清先生にお願いした。

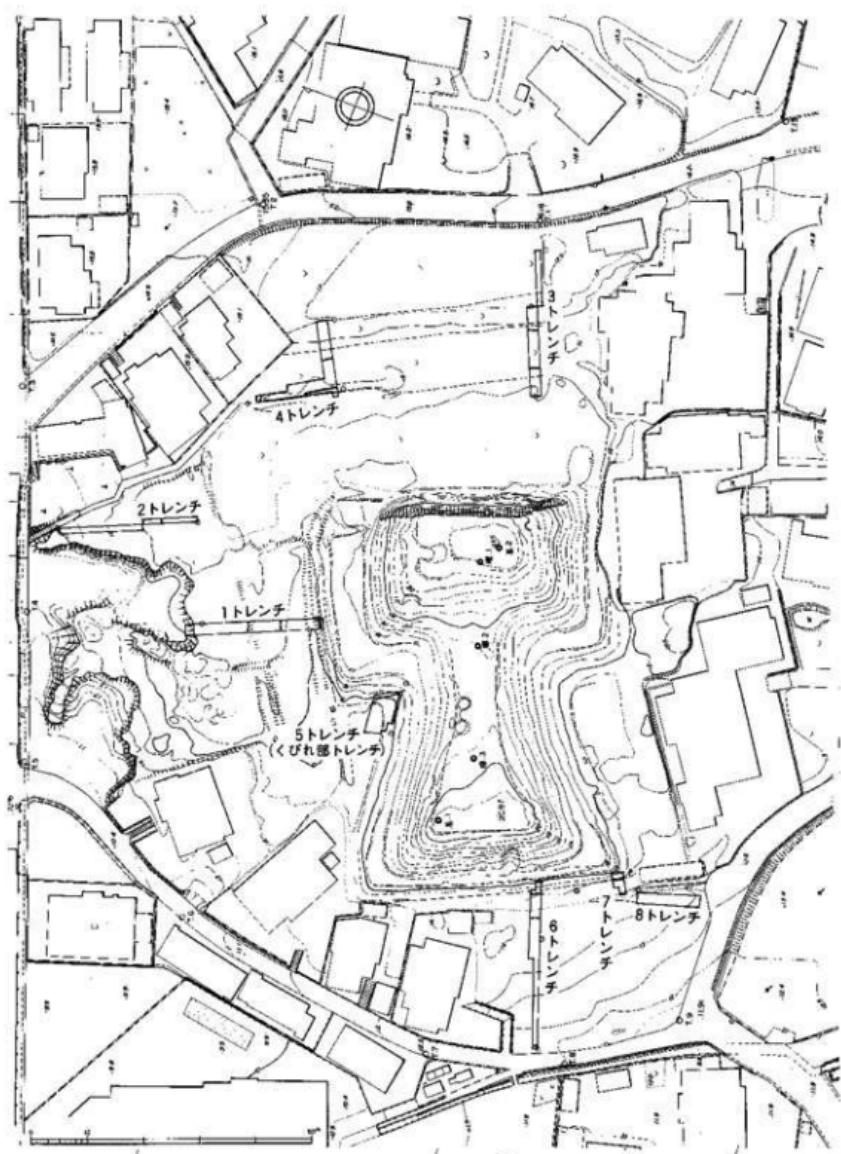
（島谷芳雄・丹羽野裕）

V 調査の結果

1. 後方部の調査

(I) 1トレンチ

後方部北辺の西寄り墳裾から墳丘の主軸方位に直交する形で設定した、長さ26m、幅2mのトレンチである。調査の結果、後方部北辺の墳端と、断面窓網状を呈し底面での幅6.85mを測る周溝を確認した。裾部と周溝北端の立ち上がりはともに急で、墳裾側では底面より76cmの高さまで57°の



第4図 山代ニ子塚古墳調査区配置図 (1:1,000)

角度をなし、外堤側は45cmの高さまでは直立するほどの状態であった。底面は平坦をなすが、標高は南端が14.43m、中央が14.35m、北端が14.24mである。

周溝および墳裾は、両端の一部断ち割りにより地山を削り出したものであることを確認したが、同時にこれにより得られた地質学的所見によると、地山は上から三瓶木次降下軽石層（黄褐色粘質土および明黄褐色砂質土）、大山松江降下軽石層（黄褐色粘質土）の順に堆積しており、周溝はこのうちの三瓶木次降下軽石層を掘り込み、底面はちょうど向軽石層間にマンガンや鉄分が沈着してきたとされる、マンガンバンドの面に及んでいた。

周溝内土層の堆積状況は、上位からおよそ表層上、暗褐色粘質土、黒褐色ないし黒色粘質土、暗褐色粘質土、黄褐色粘質土の順に凹面状に堆積しており、外堤側からの土砂の流入が強いことが窺われる。外堤側は、地山がほぼ平坦で水平に近いラインをなしていたが、周溝北端より14.6mのところからは近年の土砂採取により原形が大きく損なわれている。現存する外堤側の地山の最高値は標高15.98mであり、溝底の北端との比高は1.74mを測る。また、後方部の現存最高所は23.5mであり、溝底との比高は9.26mである。

出土遺物は少なく、周溝内の堆積土中よりさほど多くない円筒埴輪片と、須恵器で若干の子持壺片・甕片1・杯片1、それに外面に線刻のある上師器片1が認められる程度であった。

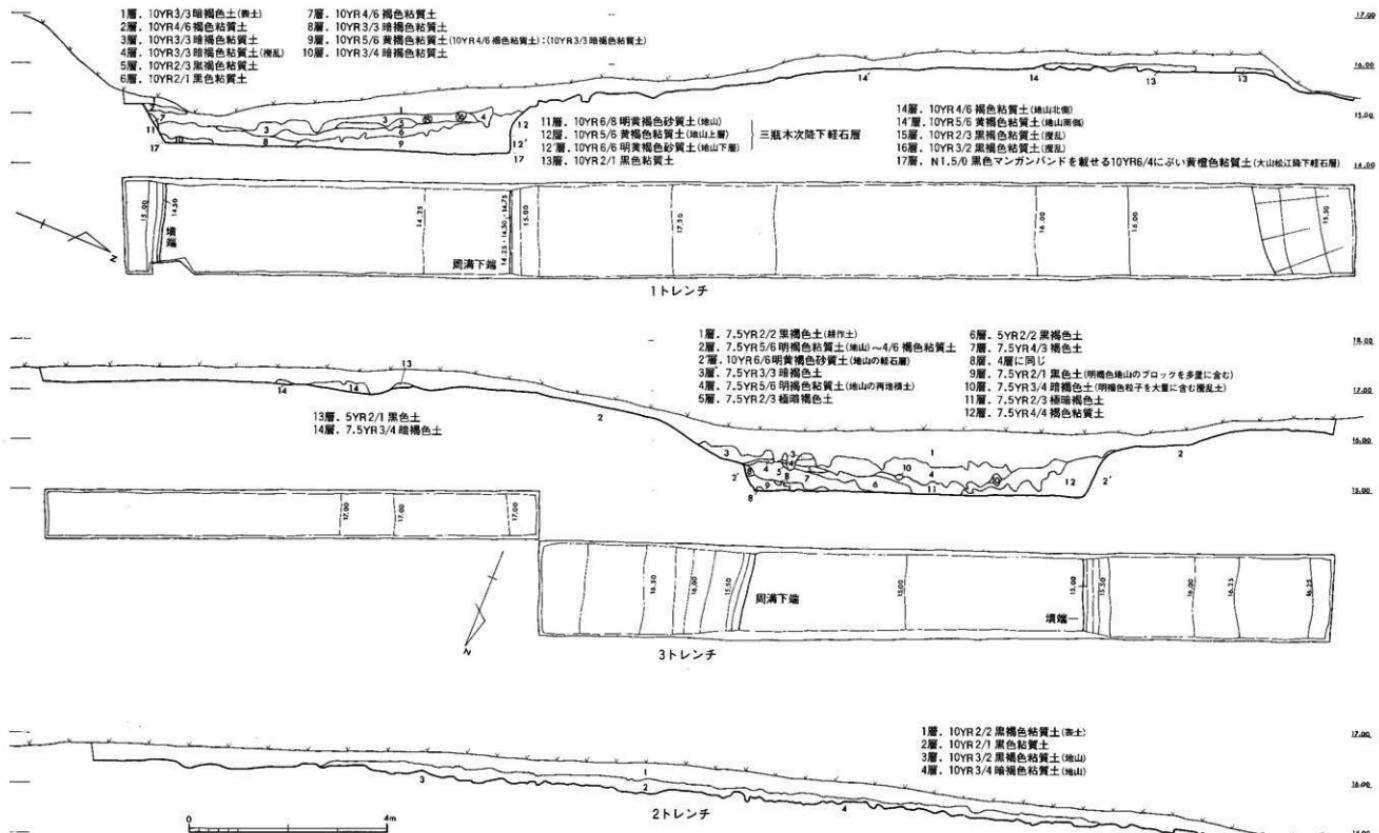
(2) 2トレンチ

1トレンチより東側に18m平行移動して設定した、長さ25m、幅1mのトレンチで、位置は後方部北辺堀より北側に約20m離れたところの緩斜面である。30~40cmほどの表土層を掘り下げると、すぐに黒褐色ないし暗褐色の粘質土地山に達した。遺構は認めなかつたが、地山はトレンチ南端より6.7mの地点を変換点として南側はほぼ水平に近く、北側は5°~8°の勾配で緩やかな斜面をなしていた。南端・変換点・北端の地山標高は、それぞれ16.44m・16.28m・14.82mである。

遺物の出土はほとんどなく、わずかに土師器と糸切り痕を有する上師質土器の細片2点が認められたに過ぎなかつた。

(3) 3トレンチ

後方部東辺の南寄りに位置し、現存墳丘部より東側に約16m離れて設定した主軸方位に平行する、長さ26m、幅2m乃至1mのトレンチである。トレンチ西側でこれまで陸軍歩兵第63連隊設置の際の土砂採取により不明瞭となっていた後方部東辺の墳端の位置と、1トレンチとはほとんど変わらぬ形状・規模の周溝を確認した。墳裾は、高さ1mほどが残存していたが、その角度は底面より88cmの高さまでは65°をなしていた。外堤側の立ち上がりも52cmの高さまでは65~70°と急であった。墳



第5図 1トレンチ, 2トレンチ, 3トレンチ実測図

裾・周溝とも地山を削り出したものであるが、底面はやはり1トレンチ同様、ちょうどマンガンバンド面に達するものであった。なお、北側で6.80m、南側で6.64mの幅を測る底面の標高は、西端（墳丘側）で14.93m、中央で14.99m、東端（外堤側）で15.04mである。

周溝内土層は、上位からおおよそ表層土、明褐色粘質土（地山の再堆積土）、極暗褐色土、褐色土ないし褐色粘質土の順に凹面状に堆積しており、一部東側の溝底付近で明褐色粘質土、地山ブロックを多量に含む黒色土の堆積が認められた。ここでも外堤側からの上砂の流入が強いことがうかがわれた。外堤側の地山はほぼ平坦で水平面をなすが、現存での地山最高値は標高17.20mであり、溝底の東端との比高は2.16mを測る。また、西端と後方部の最高所（標高23.5m）との比高は8.57mである。なお、この外堤部分は周溝東端より18mほどのところで急激に下降し、標高16.16mの市道にいたる。

出土遺物は、周溝内の堆積土中から第1トレンチ同様あまり量の多くない円筒埴輪片と、須恵器で若干の子持壺片と皮袋形土器片3が認められた程度である。
(鳥谷芳雄)

(4) 4トレンチ

後方部の北東隅近辺に設定したL字形のトレンチである。墳丘後方部のコーナーと周溝の東側、北側の立ち上がり確認を目的に調査を実施した。当初は南北方向9m、東西方向13m、幅2mのトレンチを設定していたが、北側の周溝の立ち上がりが検出できなかったために、北へ6.4m（幅1m）延長し、また墳丘立ち上がりの肩検出のため西へ1m四方の拡張を行った。

調査の結果、周溝は後方部の他のトレンチと同様、三瓶木次降下軽石屑を掘り込んで、大山松江降下軽石層上面のマンガンバンド面を底面としていることがわかった。周溝は墳丘側は底面から約66°、外堤側は約60°の角度で立ち上がり、底面で幅5mと3トレンチに比べてかなり狭くなっている。

墳裾はトレンチ南端から5.3m北部分で西方向に向かって屈曲しており、このあたりが後方部の北東のコーナーであったと考えられる。ただコーナーが必ずしも直角に曲がらず、多少の丸みをもっていることも想定されるので、墳裾ギリギリで調査をしている現状では実際の北辺はさらに北になる可能性も考慮する必要がある。

トレンチ北端では周溝の北側の立ち上がりを検出できた。幅が狭く不明瞭ではあるが東側立ち上がりの方向とは直交しておらず、コーナーは丸みを帯びている可能性もある。周溝の底面は標高14.41～14.57mと水平に近いが、1トレンチの底面よりは10～20cm高く、3トレンチの底面よりは50～60cm低い。よって周溝の底面は西から東に向かって高く、また北から南に向かって高くなっていたことがうかがえる。

周溝内の堆積状況は、まず底面上に褐色～黄褐色の均質できれいな土が堆積している（8、17層）。

この層からは遺物もほとんど出土せず、おそらく古墳築造直後のまだ植物の繁茂しない時期に流入してきた土と推定される。この土層の上には黒色系の上（3, 10, 12層）が堆積しており、植物繁茂後の堆積と考えられる。12層からは奈良時代前後の須恵器（第15図6）が出土しており、この黒色土堆積のおよその時期を示すものと考えられる。またこれらの黒色系上層からは円筒埴輪片、須恵器片等が出土している。

1層は、一括して堆積したような厚い層で、この上層内から近世～近代と考えられる磁器（第15図11）が出土しており、およそ幕末期以降の堆積と推定される。あるいは、明治期に陸軍によって行われたという採土によって生じたものである可能性もある。

（丹羽野 裕）

2. 前方部の調査

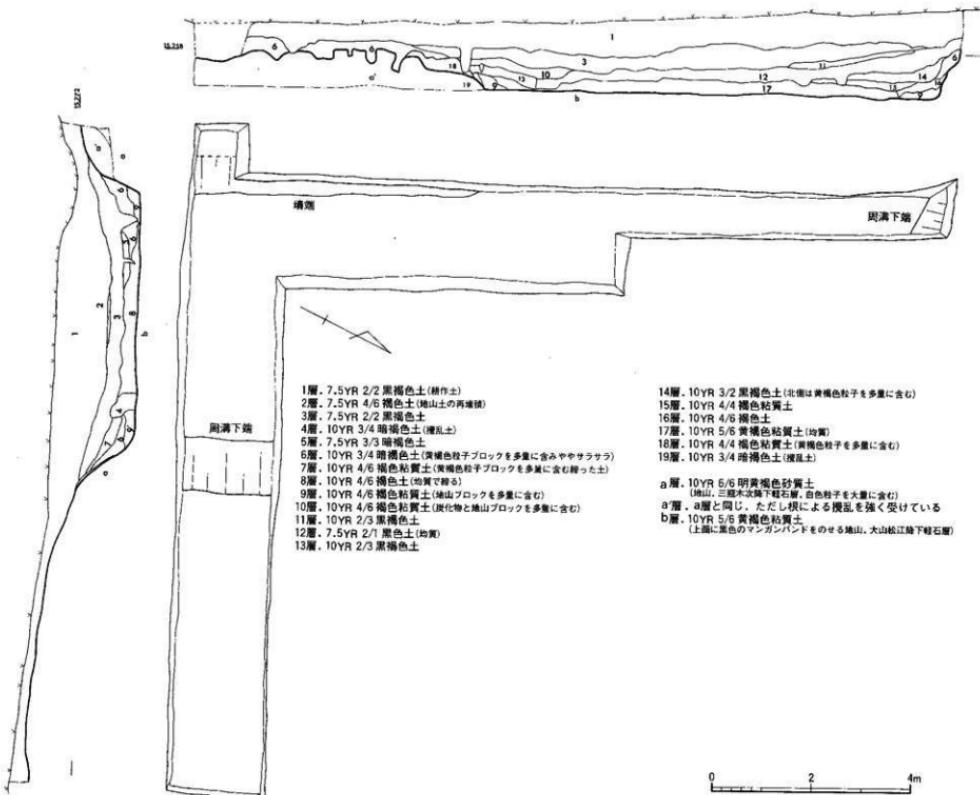
(I) 6トレンチ

前方部の先端、中央やや南寄りに、前方部の墳裾及び周溝、外堤等の状況を確認することを目的に設定したトレンチである。トレンチの東は墳裾付近に、西は現市道の境付近までに設定した長さ30mの調査区で、東端は墳裾の十分な確認のため、最終的に1.5m（幅1m）拡張した。

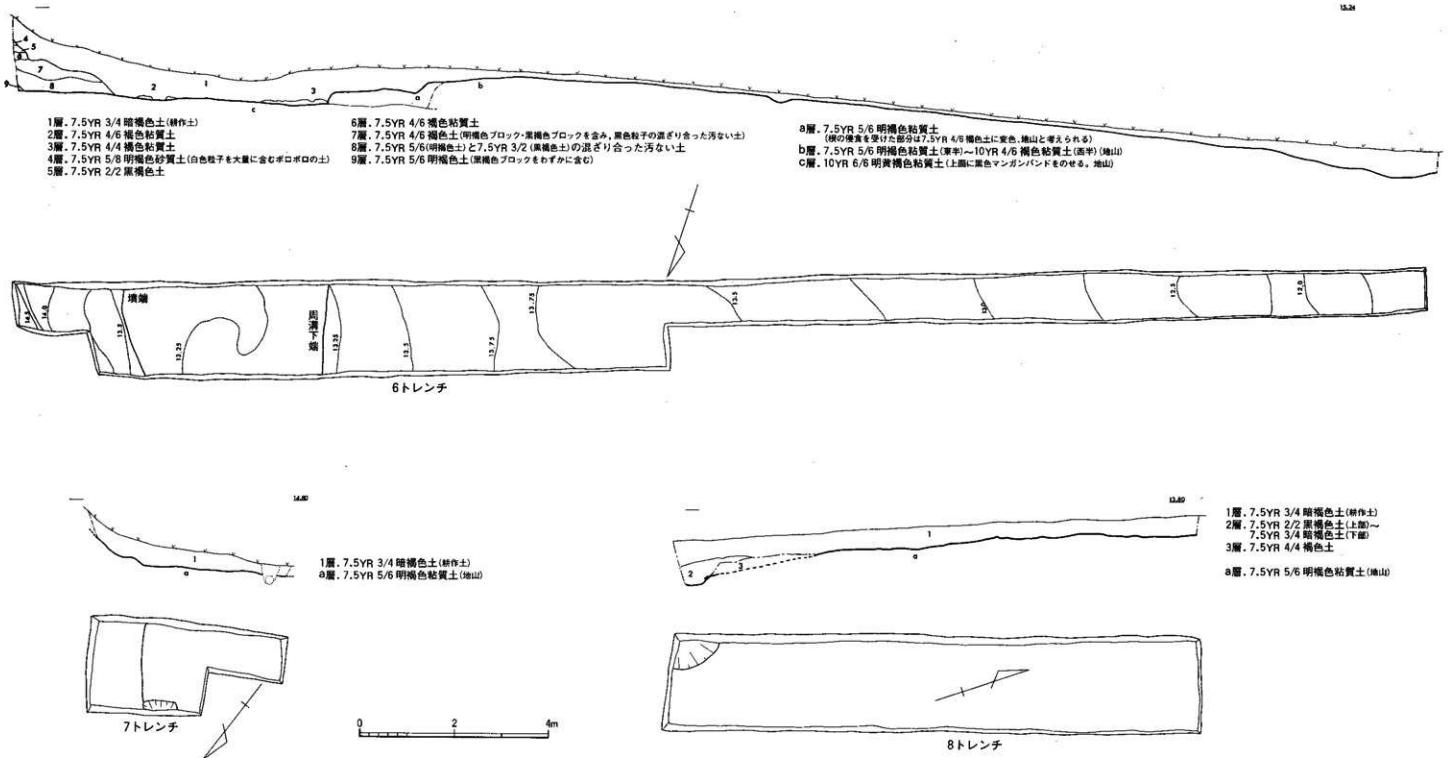
調査の結果、浅いながらも周溝の存在を確認できた。周溝は底面で幅約4.5mを測り、外堤部最高所からの深さは約60cmと、後方部の周溝に比べてかなり浅い。これは、後世の改変によるものとも想定できるが、原地形が後方部から前方部方向に向かって低くなっていることからすると、築造時から後方部に比して前方部側は周溝が浅かった可能性が高いと考えられる。墳裾及び周溝の外堤側の立ち上がり部は、浅いこともあってかなり後世の搅乱を受けているようであり、明確な立ち上がり角度は不明である。

周溝は、後方部と同様黒色のマンガンバンドを底面としており、このマンガンバンドは東から西（墳丘側から外堤側）に向かってわずかながら下に傾斜している。底面のレベルは、東側（墳裾側）で標高13.39m、西側（外堤側）で13.19mを測る。周溝の形成にあたっては、外堤側は地山を切り込んで形作っているが、墳丘側は盛土によって墳裾を形作っている。盛土は明褐色土、黒褐色土、褐色土を15～30cmの厚さで交互に水平に積み上げている。墳裾の盛土はマンガンバンドの直上に施されており、このマンガンバンドが上下2枚の軽石層の境に形成されたものであることからすると、この墳裾盛土は一度地山を削った後に行われたものであることは明らかである。あるいは、墳丘築成にあたって、まず大略を削り出す工程があり、最終的に仕上げを部分的にさらに削り出したりあるいは盛ったりということを行った結果とも考えられる。墳裾の位置は、以前島根大学の測量調査で推定された位置よりやや西側（外堤側）になることがわかった。

外堤部分は、周溝の立ち上がりから約23m西に向かって調査を行った。この部分は表土から10cm



第6図 4 トレンチ実測図



第7図 6トレンチ, 7トレンチ, 8トレンチ実測図

前後ときわめて浅い部分で地山に達する。基本的にはだらかに西に向かって下っているが、周溝から19.5m付近で傾斜がやや急になり、周溝から約22m（トレンチ西端から1m）の部分で傾斜が変換して西に向かってわずかながら上がる地形となる。この地形の変換点が外堤の範囲を示すという積極的証左はないものの、後方部での外堤部の想定規模と矛盾するものではなく、その可能性も十分にあるものと考えられる。

遺物は、周溝内の流入土から、埴輪の小片と、須恵器子持壺が出土している。

(2) 7トレンチ

6トレンチの約15m南方、前方部の南コーナーに近い部分に、埴輪の状況を探る目的で設定したトレンチである。調査の結果、地山を加工した墳壠らしい傾斜変換点を検出することができた。しかし、地山面を覆う土も耕作土1層だけであり、検出した地山面の後世の改変も著しくまた耕作その他でかなり手を加えられていることがわかっている。よってこの変換点が当時の墳壠をそのまま残しているとは考えにくい。

遺物は埴輪小片が出土している。

(3) 8トレンチ

7トレンチの南に接して、前方部の周溝の屈曲部を探る目的で南北方向に設定したトレンチである。調査の結果、耕作上下の地山面が北から南に向かって緩やかに下っており、周溝の立ち上がり等はまったく検出できなかった。しかしながら、この部分は7トレンチ同様耕作等による改変が著しい部分であることや、6トレンチでは周溝が検出されていること、墳丘南側についても未調査とはいえた民家の間に周溝痕らしき地形のくぼみが見られることなどから、この部分にも周溝は存在していた可能性が高いものと思われる。ただその周溝も6トレンチで検出されたように浅いものであったと推定される。

遺構としてはトレンチの南端で地山直上の褐色土を掘り込んだ土壤が検出されたが、その性格、時期等は不明である。

遺物は埴輪小片がわずかに出土したのみである。

（丹羽野 格）

3. くびれ部（5トレンチ）の調査

北側のくびれ部の状況を確認するためにトレンチを設定し、調査を行った。調査区は当初 6m × 4m の地形に合わせた平行四辺形に設定したが、調査を進めるにつれて、墳裾が十分に確認できないことがわかったため、南に 1m、東に 1.5m 扩張した。

調査の結果、くびれ部は当初の想定よりもはるかに複雑な状況を示していた。結論を先に述べると、銳角に形作られたくびれ部分の墳丘に、さらに盛土によってスロープ状の造構が付与されていたことが明らかになった。この盛土と墳丘の関係を明らかにするため、最終的に 4 本のサブトレンチを設定して上層の確認を行った。まずは説明を簡便化するため、土層の大略を説明しておく。

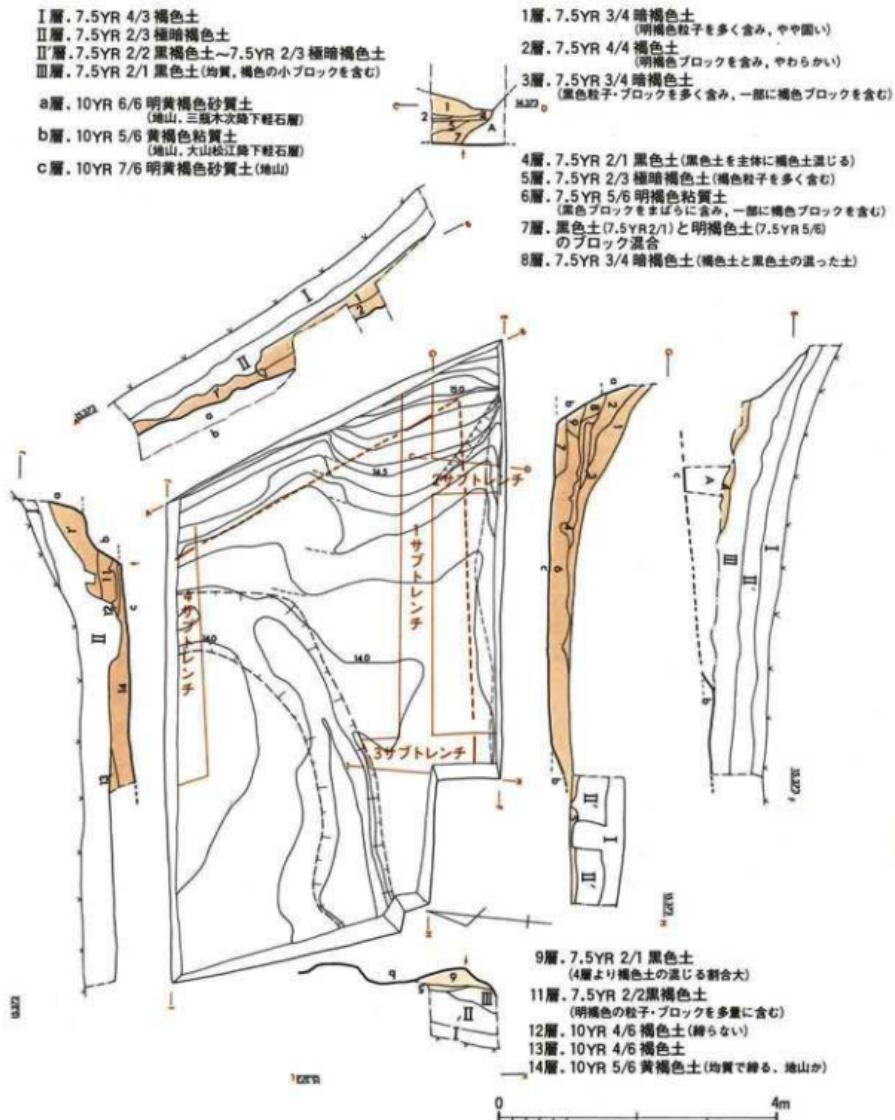
- ・ I～Ⅲ層……後世流入、堆積した土層
- ・ 1～14層……墳丘築成後に施された盛土（第 8 図、網目の上層対応）
- ・ A 層……墳丘を形作るために施された盛土
- ・ a～c 層……地山（墳丘と墳丘外の基盤を形成する）

まずこの部分の墳裾の状況であるが、最終的にスロープ状造構の保護のため全面で検出していないことから、サブトレンチでの状況をもとに復元するしかない。まず 1, 4 サブトレンチの状況から、後方部側の墳裾は地山を削り出して形作っている。1 サブトレンチ、4 サブトレンチの状況から復元すると、後方部側の墳裾は長軸方向とは直角ではなく、よって必然的にくびれ部では後方部と前方部がかなり銳角に交わることとなる。

一方前方部側の墳裾はやや複雑な状況を示す。まずくびれ部寄り（くびれ点から推定 0.9m）の 2 サブトレンチ（CDセクション）では、ほぼ水平に加工された地山の上に盛土をして墳裾を作り出しているが、より西側（くびれ点から推定 5.2m）の 3 サブトレンチ（KLセクション）では地山を削り出して墳裾を形作っている。同様の盛土は前方部 6 トレンチでも検出されており、最終的な細かい墳形の調整が切り盛りで行われた可能性が高いことを示している。

ところで堀の底面は、他の調査区ではマンガンバンド面を当てているが、このくびれ部周辺ではマンガンバンドを掘り込んで底面としている。ただし、東側（後方部側）の墳丘では、マンガンバンド面で幅 20cm 程の平面が犬ばしり状に検出されており、あるいは一度マンガンバンド面を底面に形作った墳丘を何等かの事情でさらに深く掘り込んだ可能性も考えられる。また EF 断面、GH 断面でわかるように、よりくびれ部寄り（くびれ点から推定 5m 地点から東側）では地山を 1 段深く削り込んでいるが、その目的は不明である。

次に墳丘に付設されたスロープ状の盛土だが、堀の底面及び墳丘に密着して施されている。この盛土の大要は、まず前述の底面が深く掘り込まれた部分に、水平に近い形で盛られた（5, 6, 7 層など）後に黒色土や暗褐色土を後方部に向かって高く盛り付けている。これらの盛土は余り縦まつ



第8図 くびれ部トレンチ実測図

てなく柔らかいが、最上面（1層上面）は固く締まっている。さてこの盛土はトレンチの北側で当初は把握できずに大部分を削ってしまったが、AB断面、IJ断面の観察から、後方部墳丘に対しては北に向かって次第に低くなりながらもこのトレンチの範囲内全域で盛り付けていることがわかった。しかし前方部墳丘に対しては、盛土の最上面から切れこむ形でその一部しか接しておらず、このスロープ状の盛土が主に後方部に向かって盛り付けられたものであることがわかる。しかもこの盛土の南端の落ち込み部分の方向から、このスロープは墳裾の方向と水平、直角といった自然な方向ではなく、前方部墳裾に対しては約40°、後方部墳裾に対しては約25°の角度で取りついている。この方向を延ばすと墳丘上段の後方部中央に向かっているようであり注目される。

トレンチの北西半には幅70~80cm前後の溝が検出されたが、これは後世この部分が畑として使用された際に作られたものと考えられ、古墳とは直接関係ないものである。

遺物はスロープ状盛土の上に堆積した黒色土～黒褐色土を中心に埴輪、須恵器、土師器が出士している。埴輪は、調査区の中央からやや南東ヨーナーよりのスロープの傾斜がやや緩やかになった部分を中心に出土している。出土状況は、スロープ上に5~10cm程度黒色土が堆積した上に、比較的1個体がまとまった形（図版8参照）で出土しており、おそらく直上の段平坦部に樹立していたものが流れ落ち、他の箇所と違ってスロープがあったために比較的破損が少ないままに遺存したのではないかと推測される。

須恵器は子持ち壺を中心に出土している。数個体出土し、出土状況は埴輪と同様であることから、使用状況が埴輪に近いものであったとも考えられる。また3層黒色土中からは奈良時代前後の須恵器杯（第15図8）が出土しており、この層の堆積時期を表しているかも知れない。後方部4トレンチでも、最初に堆積した黒色土より同様の須恵器が出土しており、古墳やその周囲に木々が繁茂する時期を考える上で貴重なデータとなるのではないか。また手捏ね土器が出土しており（第15図9）この部分で何等かの祭祀が行われたことが考えられるがその時期は不明である。

さてこのスロープ状の盛土の時期であるが、次のような理由で古墳築造直後のものと考えられる。

- ① 遺物の出土状況から埴輪等が流れ出す時期以前であることが明らかであること。
- ② 墳丘や堀の底面に直接接しており、流入土等何等かまないこと。

スロープ状盛土の性格については、調査範囲が狭いこともあって、十分な判断材料を持たないが、墳丘方向と無関係に付設されていることから、墳丘の形を調整する目的でないことは明らかである。一方、上面が固く締まっていることから、盛土上が踏みしめられた可能性があり、またスロープの方向が後方部中心を向いていることから墳丘、特に後方部中心上部への通路の可能性を指摘しておきたい。

（丹羽野 裕）

4. 遺物

(1) 塚輪

塚輪は調査した各トレンチから出土しており、表掲も含めて25点を図示した。くびれ部以外は大形の破片の出土は少なく、特に前方部のトレンチからは図示しうるような塚輪は出土しなかった。

表掲塚輪はいずれも角 正治宅裏、後方部南

側鋸付近で採集されたものである。

出土した塚輪は、確認できうるかぎりでは円筒埴輪のみで、形象埴輪、朝顔形埴輪等と認められるものはない。円筒埴輪の部分名称については、基本的に『出雲岡田山古墳』(昭和62年、島根県教育委員会)で用いられたそれに準拠する。ただし、本古墳出土の埴輪は3段タガのものが大部分であるため、準用できない名称については円筒埴輪部分名称図によることとする。

個々の埴輪の特徴については観察表に一括記すこととして、まずは本古墳出土埴輪の総体的特徴を列挙したい。

A. 形態的特徴

- (a) 基本的に3段のタガを持ち、タガは概してよく突出する。
- (b) 全体形は、基底部から口縁部に向かってやや開く形態で、胸部には各段互い違いの位置に、対向方向2ヶ所の円形スカシを設ける。

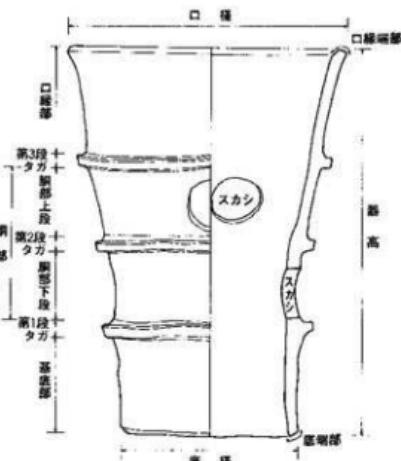
B. 調整の特徴

- (a) 外面1次調整はタテヘナメ方向のハケメを基本とする。
- (b) 2次調整は施すものとそうでないものが双方存す。
- (c) 基本的に底部調整を行っている。

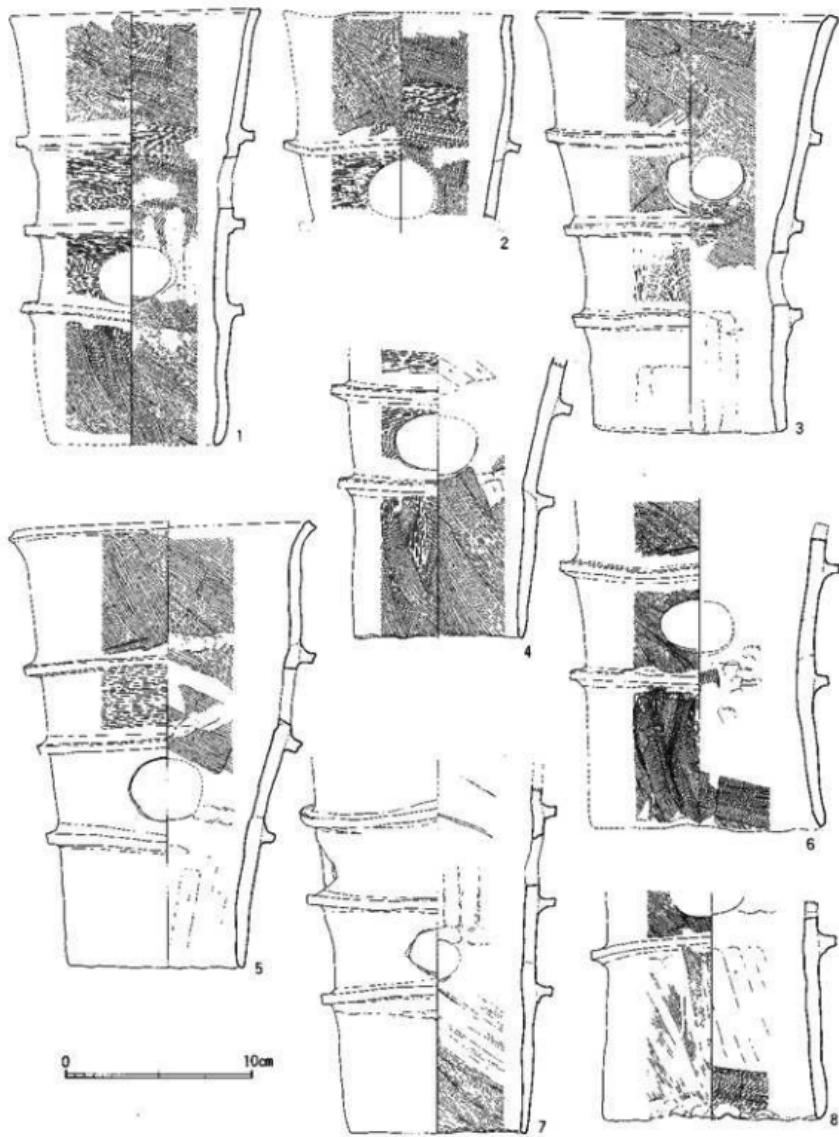
C. 烹成の特徴

須恵質、上部質双方見られるが、黒釉が観察されるものはない。

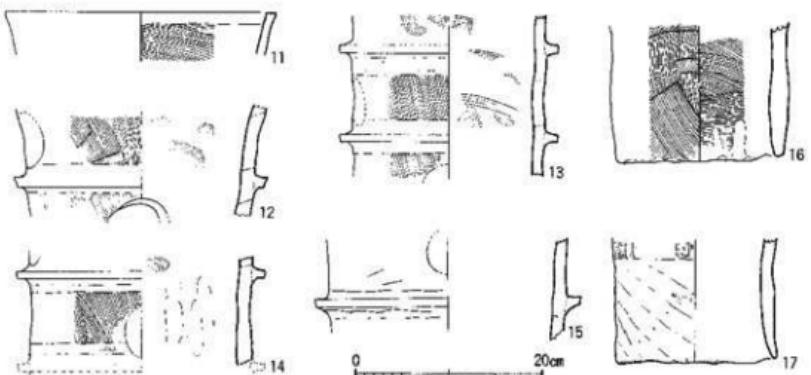
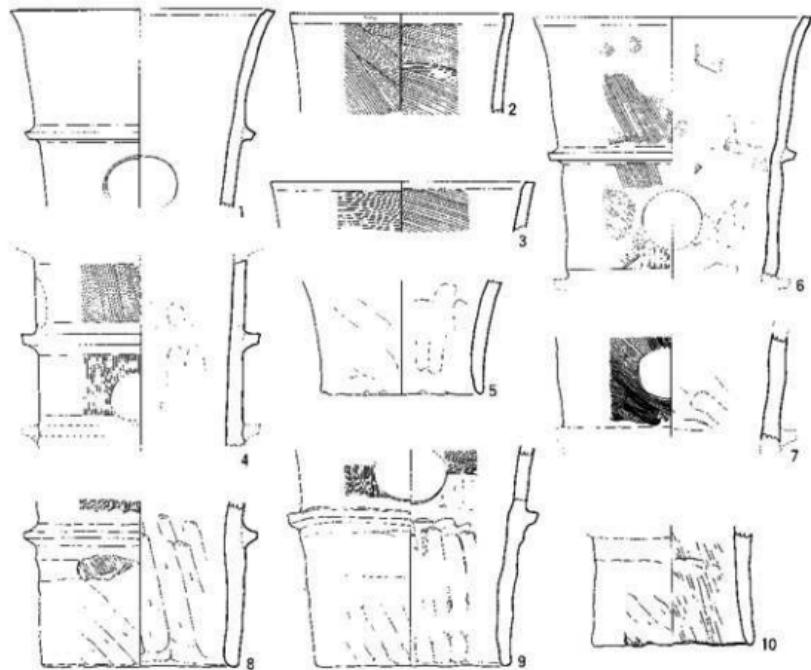
ここでBの調整について若干詳しく記してみたい。外面のハケメ調整を観察すると奥味深い個体がいくらか見られる。胸部、口縁部のタテヘナメハケがその下方のタガを貼り付けたヨコナデをきり、上方のタガの貼り付けによりきられている個体がかなり認められるのである(第10図2,3,



第9図 円筒埴輪部分名称図



第10図 くびれ部トレンチ出土埴輪実測図 S=1/6



第11図 1~4トレンチ出土, 表採埴輪実測図 S=1/6
(1~5, 1トレンチ出土, 6, 3トレンチ出土, 7~10, 4トレンチ出土, 11~17, 表採)

5, 6, 8, 第11図7, 12等)。すなわちこのハケメは、施行部の下のタガが貼り付けられた後に施され、さらにそのハケメが施行された後に上のタガが貼り付けられたことを意味する。このことは埴輪成形の際、一気に巻き上げられたのではなく、各段の積み上げごとにタガ貼り付け、ハケメ調整が行われたことを強く示唆するものといえよう。粘土紐の接合痕が、タガ部のやや上部に観察される例が多いのもこのことを傍証する。

また第10図7や第11図1の個体のように、(内)外面をきれいにナデて、1次調整を消しているものがあり注目される。

底部調整は、板状工具によるケズリに近いナデあげるような調整や指によるナデ調整を行うものと、ハケメによるものとの大きく2種類存在する。板状工具は、観察できるもので幅1.5~2cm前後と、比較的幅の狭いものを使用しているようで、板目と考えられる条線が見られるもの(第11図9, 10等)もある。またハケメを施しているものでも、ハケメ前に板状工具による調整を行っていることが観察される個体もある(第10図1, 4等)。底端部は、最終的にナデや指頭圧により調整を行うものが多く、底面を平滑にしようとする意志がうかがえるものの、切断を行っている個体は出土していない。また基底部外面の上半部がやや内湾(ヨコ方向のナデの結果か)して下半部との間に明確な変換点を持ち、下半部はタガ方向の板や指による調整を行いう例(第10図3, 第11図8, 9, 10)があり、外面調整に2つの段階を経ていることがうかがえる。

(丹羽野 裕)

山代二子塚古墳出土埴輪観察表

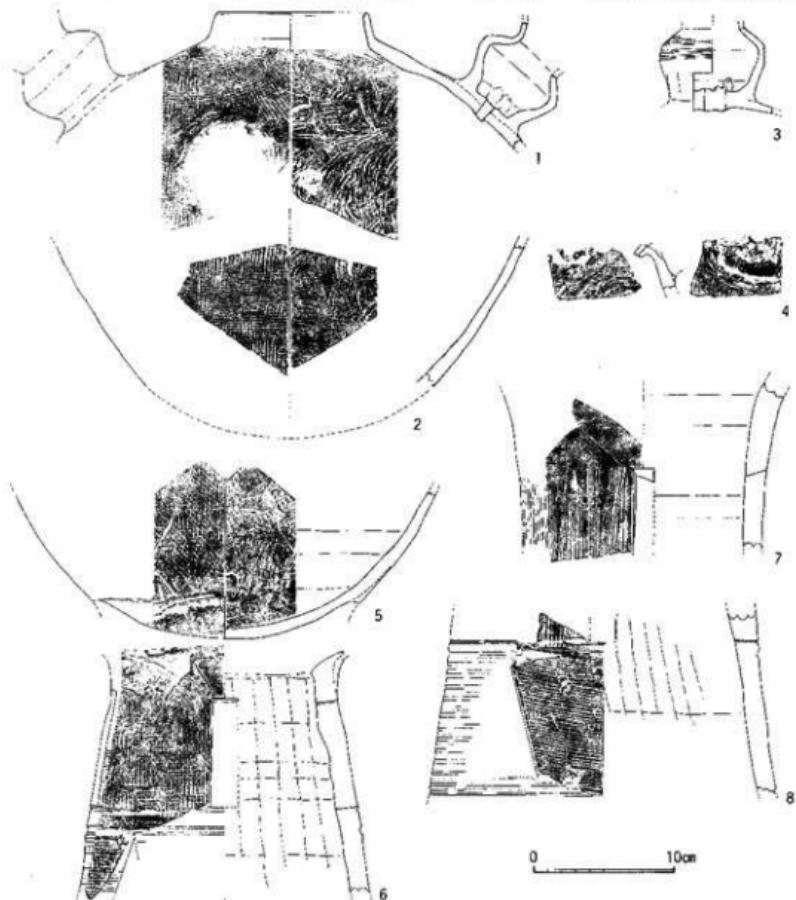
(法量括弧付きは半転推定)

番号	法量 (①口径 (cm)②最深 (cm)③器具 名)	外面調整の特徴	内観調整の特徴	底面調整の特徴	胎 色	土 調 整 状 況	備 考
10 図 1	① 46.3 (26.6)	1次調整タガヘナ メハケ、胴部: 2次 調整ヨコハケ	ヨコヘナメハケ。 胴部以下: 2次調整 タガヘナメハケ。 胴部下段付近: ヨコ ハケ	内外面: タガヘナメ前 か。胴部下段付近: ヨコ ハケ	最大2mm前後の白色細粒を少量含む 下半: 淡褐色(須恵質), 上半: 淡 褐色(七輪質)	基底部ひずみあり	
2	① 25.0 以上	口縁部: タガ貼付後 ナナメハケ、胴部: 1次調整タガヘナ メハケ、胴部ヨコハケ	ヨコヘナメハケ。 タガ付近にハケメ後 指頭圧	-	最大2~3mmの白色粒含む 外側: 黒褐色, 内面: 淡褐色 (須恵質)	口縁部ひずみあり	
3	① 31.1 ~31.6 ② 20.7 ③ 44.7	口縁部: 胴部上半: 下方タガ貼付後ナ ナメハケ、胴部下半: タガハケ(1次)	ナナメハケ(2工藝 に分かれるか)	タガ方向の強いナデ状 の調整。底面は面を取 るように調整	最大1mm前後の白色細粒含む 底面: 淡褐色 背道(七輪質)	に腰端部はハケメ 後切るような加工	
4	① 17.5 ~18.5	胴部: 2次調整ヨコ ハケ	腰端上半: 斜め方 向の削るようなナデ, 胴部下半: 不規	タガ方向の板ナデ後タ ガヘナメハケ	黒褐色 淡褐色 やや不良(土師質)	表面かなり風化	
5 図 5	① 32.8 ② 17.8 ③ 47.4	口縁部: タガ貼付後 ナナメハケ、胴部: 上半2次調整ヨコハ ケ、下半不明	中段タガ部分以上ナ ナメハケ(タガ貼付 後), タガ相当部に 指頭圧	内面: 板状工具によ るタガ方向のナデか。外 面: 不明	白色細粒をわずかに含む 淡褐色 不良(上部質)	表面風化著しい	
6	② 14.2 ~25.0	胴部: 下方タガ貼付 後ナメハケ(上方 タガには切られる)	ナデ, 一部にハケメ	内面: タガ方向にナデ 後(板状工具によるタ ガ方向のナデ)。底面付 近: ヨコヘナメハケ	最大1mm強の白色細粒含む 上半: 淡褐色, 下半: 淡褐色 良好(下部は須恵質)	基底部かなりひず む, ハケメ解体後 板が右から左に次 第に大きくなる	
7	② 18.5	全面ナデにより調整 風を消している	口縁部付近: 板状工 具による削る上方向 への張り, 脇部: ヨコ ハケナデ	外側: ナデ消し(ハ ケメ), 内面: ナナメ ハケナデ	最大1mm程度の白色細粒を含む 淡褐色 良好(一部灰質)	タガのやや上方で 接合部観察される	

番号	法①口径量 (mm)②底面 ③高さ	外側調整の特徴	内面調整の特徴	底部調整の特徴	胎 色 焼	土 調 成	備 考
8	② 23.5	脚部：下方タガ貼付後ナメハケ		外側：タガヘケ脚部下 方ナメハケ。内側：タガ向 ツア後横方向ナメハケ。内 側ナメハケ方向ナメハケ ひょうじん頭部。	I-mm前後の白色砂粒をかなり含む 淡褐色(一部外周風化部分褐色化) 良好(頭部近いが外周一部劣化)		
11 12 1	① 28.5	口縁部、脚部：タガ ハケ後横方向ナメ	横方向のナメ。指頭 圧痕	—	密だが砂粒多く含む 赤褐色 良好(上部質)		
2	①(24.2)	ナメハケ	ヨコヘナナメハケ	—	密だが砂粒多く含む 赤褐色 良好(上部質)	口縁部平滑面を なす。口縁部1/8 周残存	
3	①(28.5)	ヨコヘナナメハケ	ヨコヘナナメハケ	—	密だが砂粒多く含む 明赤褐色 良好(上部質)	I-mm部1/9周残存	
4	脚部最大径 (22.8)	タガハケ(1次調整)	ナメ、指頭圧痕	—	密だが砂粒多く含む 赤褐色 良好(土頭質)	脚部1/5周残存	
5	②(17.5)	—		内外裏：指頭H. ナメ	密だが砂粒多く含む 淡褐色 やや不良(十部質)	基底部1/4周残存	
6	①(29.8)	タガヘナナメハケ (1次調整)	ヨコヘナナメハケ。 ヨコ部分以下指頭圧 痕、ヨコ、ナメ方 向のナメ	—	密だが砂粒多く含む 赤褐色 良好(上部質)	脚部上段以上1/4 周残存	
7	脚部最大径 (24.4)	脚部：下方タガ貼付 後ナメハケ	ナメ	—	最大2 mmの大白色褐色砂を含む 赤褐色 やや不良(上部質)	裏面の一部風化	
8	③(20.8)	脚部：1次調整タガ ハケ		外側：板状工具でナメ 方向にナメ。内側： タガ方向に板状工具で ナメ	細砂粒(白色、透明)かなり含む 淡褐色 良好(土頭質)	底面外周の一部に エグレ(ハケ 擦痕状のものに上 る)	
9	③ 20.7	脚部：板状工具によ るタガ方向ナメ後ヨ コハケ	脚部：板状工具によ るタガ方向ナメ後ヨ コハケ	外底：下：底面はヨコ 方向にえぐりようナメ。 内底：ナメ。内面にヨ コハケ。内面にヨコハ ケ方向にヨコハケ。底 部底面はヨコハケ。	白色砂粒をわざかに含む 黄褐色(淡赤褐色 やや不良(土頭質)) 底面仕様はヨコハケ。		
10	③(17.4)	—	—	外側：ナメ方向板ナ メ後ナメ。内側：底で ナメあげるような調整	密だが砂粒含む 赤褐色 良好(土頭質)	基底部に一部亀裂 あり	
11	①(29.0)	風化のため不明	ヨコヘナナメハケ	—	密だが砂粒含む 赤褐色 良好(土頭質)	口縁部1/10周残存	
12	タガ部径 (24.6)	脚部上段：下方タガ 貼付後タガヘナナメ ハケ。脚部下段も同 様か。	指頭圧。ナメ、ヨコ ヘナナメハケ		密だが砂粒多く含む 赤褐色 良好(土頭質)	中段タガ部1/4周 残存	
13	脚部径 (21.0)	タガハケ(1次調整)	ナメ、ヨコハケ	—	密だが砂粒含む 赤褐色 良好(土頭質)	脚部1/6周残存	
14	脚部径 (21.5)	タガハケ(1次調整)	一部ナメハケ。指 頭圧タガ方向のナメ	—	密だが砂粒含む 赤褐色 良好(土頭質)	脚部1/4周残存	
15	脚部径 (25.6)	ナメ	指頭圧。ナメ	—	密だが砂粒多く含む 黒褐色 良好(頭部質に近い)	タガ部1/8周残存	
16	②(18.8)	—		外側：タガヘケナメハ ケ。内側：上半ナメハケ。 内底：ナメ。内側底面：指頭 ナメ。基底部：指頭 ナメ	砂粒多く含み、やや粗 赤褐色 良好(上部質)	基底部1/4周残存	
17	②(17.3)	—	—	外側：ヨコナメ指頭ナ メ。内側：ヨコナメナメ。 脚部：指頭圧。指頭ハケ	密だが砂粒含む 赤褐色 良好(頭部質に近い)	基底部3/4周残存	

(2) 須 恵 器

第12図、13図、14図1～4、7～8は、須恵器子持ち壺の破片で、12図、13図はくびれ部トレンチ、14図はその他のトレンチで出土したものである。第12図1は口縁部から肩にかけての破片で、口縁部はやや内傾しながら直線的に立ち上がり、端部は丸くおさめる。子壺は底部があるものを規定して接合しており、内側には幅1cm程の工具で刺突して接合した痕が認められ、接合後（焼成前）に径7mm程の孔を開けている。なお頸部付近に蓋をのせて重ね焼きしたと見られる痕跡（色変）が



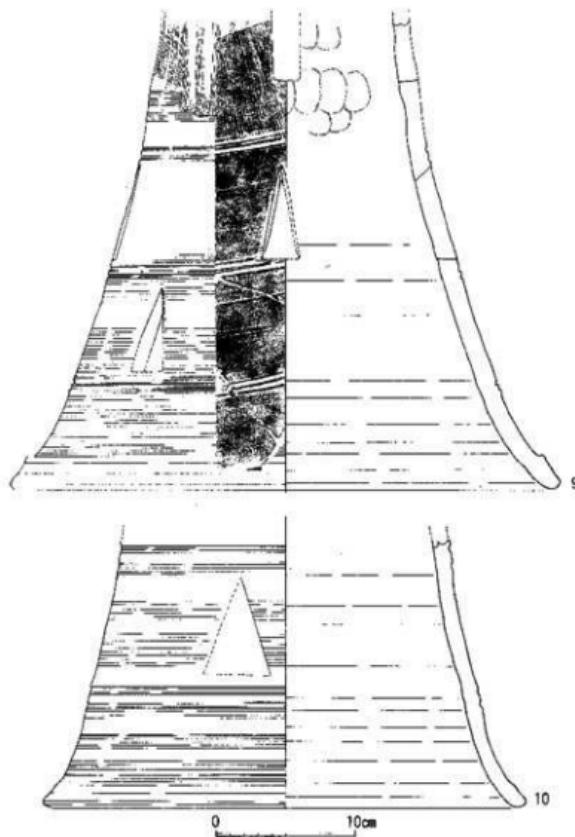
第12図 くびれ部トレンチ出土須恵器実測図(1) S=1/4

観察され、蓋がセットになるものと考えられる。ちなみに蓋の径は14.2cmに復元される。2は小片で詳細は不明だが、底部に近い部分と考えられ、1と同一個体の可能性もある。3は子壺で、1と同様底部を持つものを接合後、穿孔している。外面肩には2条の浅い沈線を施し、その上にはカキメ状の条線が観察される。4は親壺の子壺を接合した部分の破片である。

5は親壺の底部である。外面は平行タタキ後ナデ、内面は同心円タタキ後ナデを施しており、丸底の底部に脚を貼り付けた痕が残っている。接合は外面部分だけに薄く粘土を延ばして貼り付けているため、きれいに全周はがれている。色調は暗青灰色～淡黒褐色を呈す。5は脚部の上半片である。親壺の接合部分から

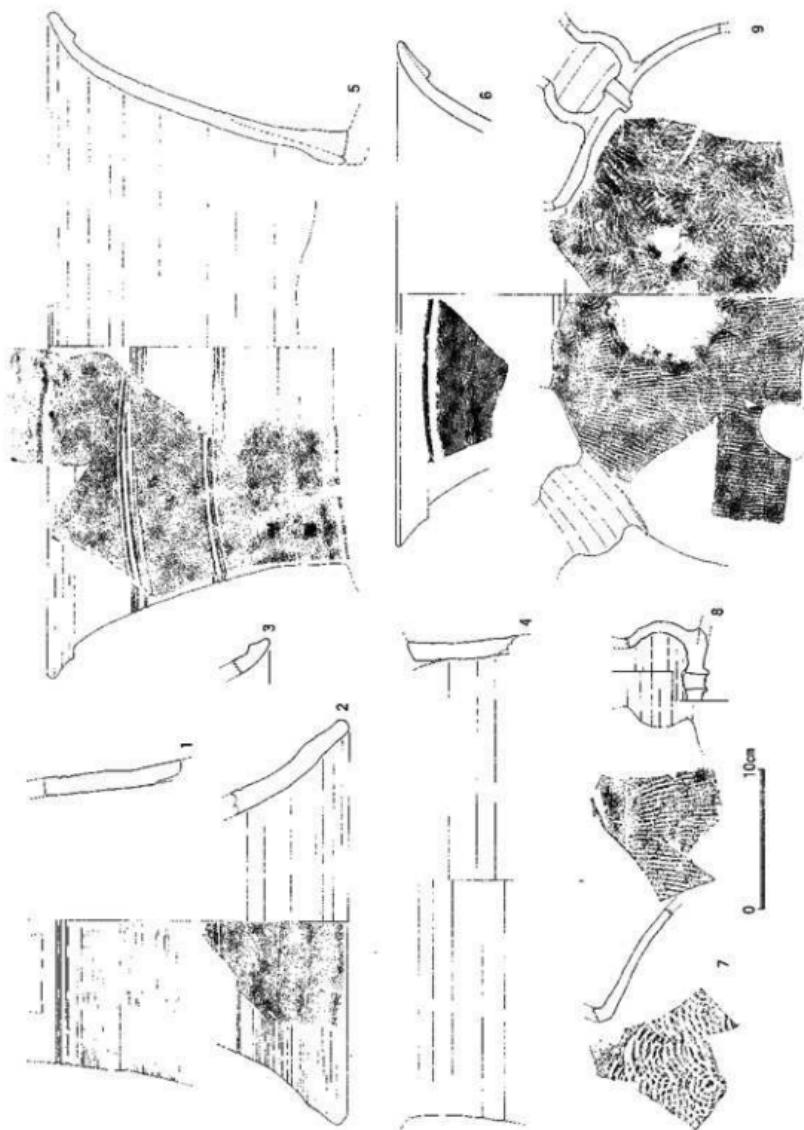
10cm程下方に2条の浅い沈線を施し、その上方には5方向に長方形のスカシを、またその下方には上段のスカシと互い違いに三角形のスカシを設けている。外面は平行タタキ後ナデ、内面は縦方向のナデを施す。色調は青灰色を呈す。5と6は色調は異なるものの、接合部分の径や接合方法がまったく同様であり、同一個体の可能性がある。

7は脚部の親壺に近い部分の破片である。長方形のスカシ（数は不明）が見られ、外面はハケメ、内面は横方向のナデを施す。親壺の底がない個体か。8は脚部の中間部の破片である。2条の浅い沈線をはさんで、上方に



第13図 くびれ部トレンチ出土須恵器実測図(2) S=1/4

第14図 1, 3, 4, 6 トレンチ出土須恵器実測図 S=1/4 (2-7... 1トレンチ, 1-3... 3トレンチ, 4-6... 4トレンチ, 8-9... 6トレンチ出土)



は平行タタキを施し長方形のスカシ、下方にはカキメを施し三角形のスカシを設ける。9は最上部分を欠くものの大形の脚部片である。下方に向かって次第に外方に開き脚端部は外面を肥厚させ段を設けており、外面は2条沈線で全体を4つの区画に分けている。最上段は平行タタキ後カキメ後ハケメと複雑な調整を行い、4方向に長方形のスカシを設ける。2段目はカキメの後にナデしており、上段と同じ位置に4方向にスカシを開ける。3段目はカキメを施し、上2段と互い違いの位置に4方向スカシを開けている。最下段はカキメのみでスカシはない。内面は最上段相当部には同心円タタキ後指頭圧痕、下半は回転ナデを施す。10も脚部だが、脚端部は丸く納めている。

第14図1～4は脚部でいずれも小片である。4は、親壺の底部に接合する種類のものであろうが、他の個体と比べて径が大きい。8は子壺、9は親壺胴部から頸部にかけての破片で、基本的特徴は第11図1と同様である。頸部には蓋をのせて焼いた痕と思われる色変が見られ、胴部の最大径部付近に円形のスカシが開く。この9と12図1は、全形は不明であるが、形態が岡田山1号墳出土の子持壺とよく似ており、脚が付かないものである可能性もあり注意を要する。

6,7は壺の口縁～頸部片である。ともに口縁部は外面を肥厚させて段を設け、頸部には振幅の小さい横描波状文を施す。

第15図1～3は3トレンチ出土の皮袋形上器の体部破片と考えられるものである。1は胴下半片、2,3は胴下端の接合部片で、2は両端に近い部分であろう。色調は淡褐色を呈し、調整はいずれも内面回転ナデとし、外面はナデで仕上げ、1,2に竹管文が認められる。

4は、杯または有蓋高杯の破片である。口縁はやや内傾して立ち上がり、立ち上がりの高さは1.5cmを測る。復元径が受け部で16cmと大形だが、小片であり不確定な数値である。5は高杯と思われる破片で、脚部は下方に向かってわずかに開き、外面には細かいカキメを施す。スカシは見られない。

6～8は奈良時代前後の杯である。いずれも体部が底部からやや外方に向かって真っ直ぐのび、底部が確認できる。6,8には回転糸切り痕が残る。基本的に同時期のこれらの杯が6は4トレンチ、7は1トレンチ、8はくびれ部と各所で出土しており興味深い。

第16図は表採須恵器である。5は前方部先端中央の裾部、それ以外は角 正治宅裏、すなわち後方部南側裾部付近で採集されたものである。4は壺の口縁部から頸部にかけての破片、それ以外は子持壺の破片と考えられる。1は、頸部から肩部にかけての破片、2,5,6は脚部で透かし穴が認められる。7は脚端部の破片と考えられる。

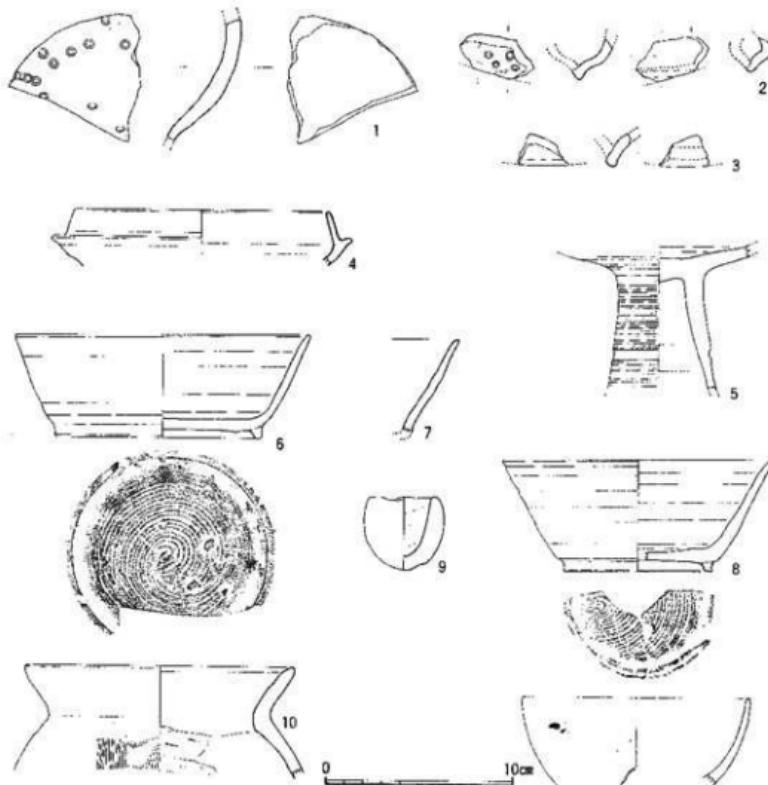
(鳥谷芳雄・丹羽野 裕)

(3) その他の遺物

土師器 第15図9はくびれ部から出土した手捏ね土器である。10はくびれ部出土の土師器甕で、外面には煤模が残る。この9, 10の時期の特定は難しいが、8の杯と近接して出土しており、奈良時代前後のものへの可能性もある。

磁器 第15図11は4トレンチ1層出土の磁器碗である。白磁胎の体部外面に長須で草花を描いている。時期等の詳細は不明だが、近世末～近代のものか。

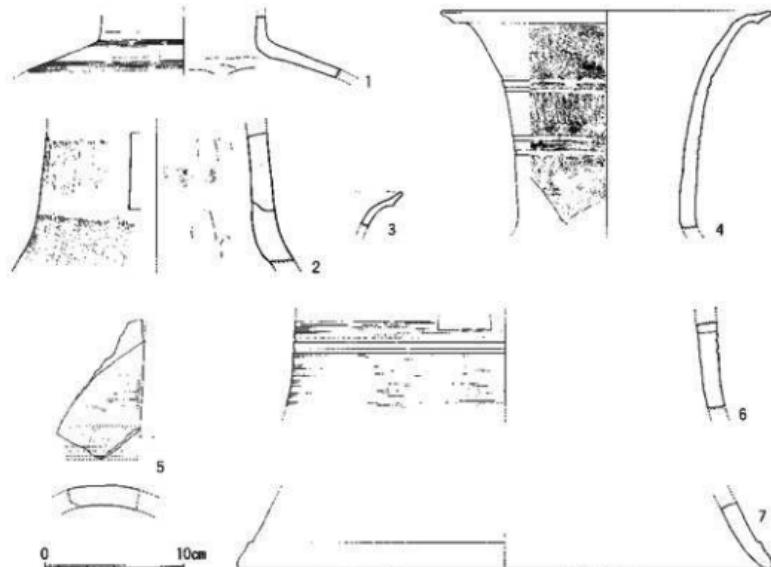
石器 (第17図) 1は黄褐色の緻密な石材の剝片である。自然面を大きく残す打面から剝ぎ取った比較的形の整った剝片で、背面には自然面とともに腹面と同方向の剥離面が数面見られる。やや



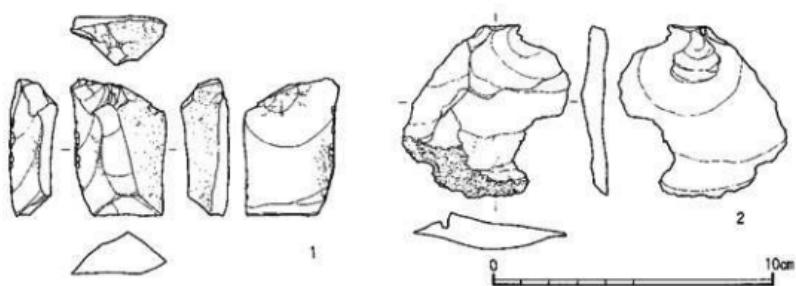
第15図 1～4トレンチくびれ部トレンチ出土遺物実測図 S=1/3
(7・1トレンチ出土, 1～3・3トレンチ出土, 4・6・11・4トレンチ出土, 5・8～10・くびれ部出土)

分厚で両側縁には使用痕らしき微細な剝離痕が観察される。2は安山岩製の剝片である。全体に風化が著しいが、平坦打面から剥ぎ取られた不定形剝片である。背面には腹面と同方向の剝離面が数面見られ、底面には自然面も残る。これらはいずれも堀の流入土より出土しており、古墳の盛土内に含まれていたものであろう。これらの石器の時期は不明と言わざるを得ないが、剝離技術の特徴や風化度から旧石器時代にさかのぼる可能性もある。

(丹羽野 裕)



第16図 表採須恵器実測図 S=1/4



第17図 石器実測図 S=1/2 (1:6トレンチ出土, 2:4トレンチ出土)

VI まとめ

1. 墳丘形態について

(1)

今回の調査では、周辺部の補足測量と墳丘外における周溝等外部施設の確認調査を実施した。補足測量は、かつて島根大学が測量した時にはひどいブッシュのため不十分な図化しかできなかつた墳丘外北側の一節について、改めて全面伐採して補調したものである。別添図は両者を合成して製図した山代二子塚古墳現況測量図の決定版である。

周辺部の確認調査については、墳丘の東・北・西側に計8ヶ所のトレンチを設けて発掘した。壮大な古墳の規模に比べればほんの一部を調査したにすぎず、加えて、南側や北西側には民家があつて発掘できなかつた。そのため本来の墳丘形態を復元するという点からすることははだ不満足な調査とならざるをえなかつたが、ここで一応のまとめと問題点を記しておきたい。

(2)

8ヶ所のトレンチのうち、1・3・4・6の各トレンチでは見事な周溝が現われ、墳裾（周溝内側の下端）と周溝外側の立ち上がりが明瞭に確認された。周溝は地山の三瓶木次降下軽石層（SKP）を掘り込み、その下位にあるマンガンバンドの黒い固い平坦な面を溝底とするものである。ただ、北くびれ部の5トレンチ付近では、マンガンバンドの面が高すぎるため、さらにその下の大山松江降下軽石層（DMP）を掘り下げ、深く掘りすぎた部分には埋土をして溝底を整えたようである。

前方部前面の6トレンチでは、周溝外側の立ち上がりは地山だが、内側つまり墳裾は盛土の立ち上がりとなっており、他のトレンチと様相が異なっている。この部分では、一口マンガンバンドの面まで下げたのち、前方部端を盛土で造成することになる。また、北くびれ部の5トレンチでも前方部の墳端の一部は盛土をして整えている。本墳は基本的に地山を削り出したのち盛土して築かれていると考えられるが、細部の造成に当っては墳裾部にも各所で盛上がなされたことがうかがえる。

周溝内外の立ち上がりはきわめて急峻で、とくに後方部側では簡単には登れないほどの傾斜となつてゐる。葺石は使用されていない。周溝内覆土の状況からみて、空掘（隙）であったと考えてよい。後方部背面（東側）の周溝底面を基準にすると後方部頂の比高は約9m、前方部前面（西側）のそれを基準にすると前方部頂の比高は約7.5mとなる。

溝底のレベルは、自然地形ないしマンガンバンドのレベルに規定され、南東方が高く西に行くに

従い低くなっている。溝底と周溝外堤との比高も現状では東ほど高い。後世の耕作・削平の影響も大きいと考えられるが、自然地形が西方ほど低くなっているので、西寄りつまり前方部側の周溝はもともと浅かったのかもしれない。溝底の幅は、次表に示したようにかなり多様である。但し、4トレンチ北側の周溝はすでにふれたように実際にはもう少し狭くなると予想される。

各トレンチにおける周溝と外堤（計測値は概数m）

トレンチ	溝底標高	溝底幅	外堤との比高	外堤幅(現状)
3	15.0	6.7	2.2	18
4	(東)	14.5	5	2.0
	(北)	14.5	9	—
1	14.3	6.9	1.7	15以上
5	14.1	—	—	—
6	13.3	4.5	0.5	22

周溝外堤については1・3・6トレンチおよび2トレンチで調査を行ったが、いずれも盛土は認められず地山のままであった。しかし各所とも外堤の高まりの幅は20m前後と揃っており、とくに東側では明瞭な土壘状をなしている。後世の地形変化が著しいため確言はできないが、地山を削り出して整形した外堤帯が古墳の周囲を長方形にめぐっていた可能性を想定したい。

(3)

第18図は各トレンチの所見をもとに、古墳の墳端、周溝外側の立ち上がり、そして外堤帯外縁の想定ラインを結んで、古墳の本来の形状を復元・想定したものである。但し、南側での調査がまったくできなかったので南半は現状の墳丘および北半との対称を考えて机上で作図したものであり、前方部についても、7および8トレンチで明確なデータが得られなかつたためやや不確実である。

本墳の墳丘形態についていくつか注意される点を述べると、一つは、現状の墳丘のみかけの主軸と周溝（少なくとも後方部の）のラインとが必ずしも直交・平行の関係にならないことである。つまり、前方後方墳の現状の墳丘と外郭が長方形をなすであろう周溝とが、整合した関係にならずに若干ずれているようにみえるのである。これは鳥根大学の測量の折にも指摘されていた問題であるが、将来、墳丘そのものおよび南側における周溝の発掘調査を行うことができれば解決されるであろう。あるいは、局部的な変形に惑わされているだけなのかもしれない。

第二に、くびれ部が後方部側にややはいり込んで、後方部の前方部寄りコーナーが鋭角をなして

いると考えられることである。

第三は5トレンチにみられた北くびれ部の特異な構造である。すでに詳述したように、ここでは墳丘造成後に、くびれに接する後方部側に、周溝の面から後方部頂上方向に登って行く「斜道」状の盛土がなされている。葬送行為に関連した付加施設である可能性が考えられよう。

なお、今回の発掘で新たに判明した本墳の規模は次のようである。

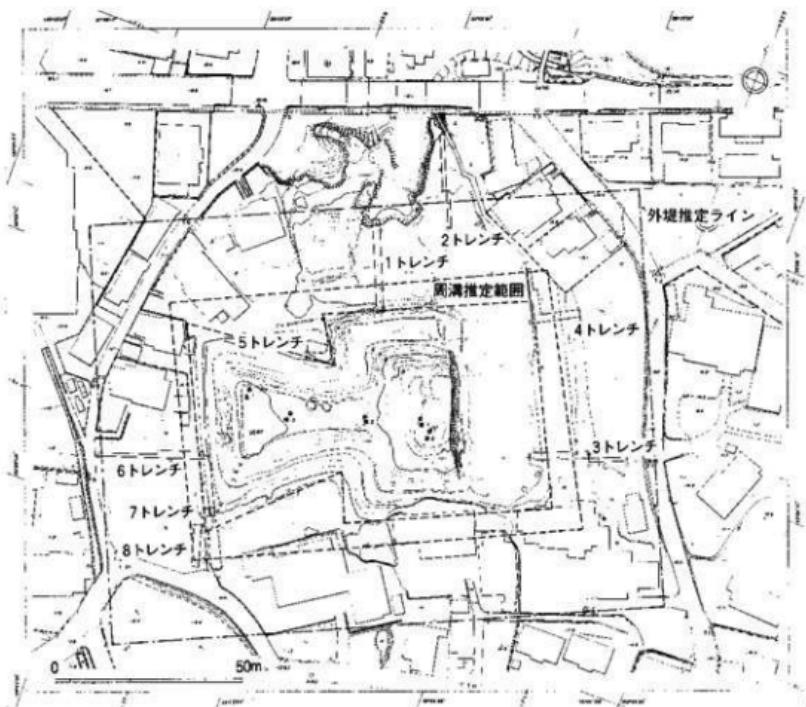
墳丘全長 94m

後方部1辺（北辺） 56m

周溝を含めた全長 104m

外堤を含めた総長 約150m

（渡辺貞幸）



第18図 山代ニ子塚古墳復元推定図 S=1/1500

2. 出土遺物について

(1) 円筒埴輪

円筒埴輪は量の多寡を問わねば2ヶ年にわたって調査した8ヶ所の調査区すべてから出土している。このことから、山代二子塚古墳は、少なくとも段平坦面の全局に連続して円筒埴輪が樹立していた可能性が高いといえる。また各調査区の出土量と埴輪測量図を引き比べてみると、段平坦面が明瞭に観察できない前方部北側に近いくびれ部トレントで多量に出土し、段平坦面が明瞭に観察できる後方部北側や前方部西側の下方に設定した1トレント、6トレントでは少量しか出土していない。このことは現地表の観察により残りがよいと判断される部分については、埴輪も現位置を保つて遺存している可能性が高いことを示しているといえよう。それは取りも直さずこの古墳の保存状況が良好であることの証左でもある。

さて本古墳出土の円筒埴輪の編年的位置であるが、出土した埴輪は古墳全体から見ればわずかの割合でしかなく、古墳の時期決定を行うだけの十分な量とはいえないが、大雑把な把握は可能と思われる。編年の準準としては、出雲地方ではタガの形態や調整のあり方は、新しい時期まで古相の特徴が残存することが知られており比較的変化の追いややすい底部調整を取り上げたい。⁽¹⁾

さて現在のところ、この周辺で底部調整が施された埴輪を持つ古墳でもっとも古いと考えられるのは古曾志大谷1号墳である。この大谷1号墳出土埴輪の底部調整の特徴は、倒立した状態で内外面にハケメを施し、さらに底端部を工具で平滑に切り取っていることである。⁽²⁾ 同様の特徴を持つ埴輪は、本古墳の近辺の向山西2号墳にも認められる。これらの古墳の時期は大谷1号墳はおよそ5世紀末頃、向山西2号墳は山陰須恵器編年Ⅱ期といわれている。これらと山代二子塚古墳出土埴輪を比べると、ハケメ調整は施している個体は見られるものの、底端部の切取りはまったく見られない。底部調整が簡略化、省力化の方向に向かって変化するとするならば、本古墳出土の埴輪は明らかに大谷1号墳、向山西2号墳出土埴輪より新しいものといえる。

ところで新しい時期で埴輪を持つ古墳で比較的の様相が明らかになっている古墳としては松江市大庭町岡田山1号墳があげられる。この岡田山1号墳出土埴輪の底部調整は、指や板によるナデ、オサエによるものが主流でハケメを施すものはほとんど認められない。⁽³⁾ 岡田山1号墳の時期については様々な意見があるものの、およそ6世紀後半で大過ないものと思われる。一方それに比して二子塚古墳の埴輪の場合、底部調整にハケメを施すものがかなり認められ、また底端部を最終的にナデ等で調整して面を揃える意図がうかがえるなど、古い特徴を残しているといえる。

以上のように、円筒埴輪から見ると山代二子塚古墳は向山西2号墳よりは新しく、岡田山1号墳よりは新しい時期ということはいえそうである。これは波辺貞幸氏がかつて採集資料を元に示された6世紀中葉～後葉という年代観と矛盾しないものといえる。⁽⁴⁾

(2) 須恵器子持壺

子持壺は、今回の調査で後方部東側、北側、南側（表採）、くびれ部、前方部西側と、古墳の全域で出土している。こうした出土状況から、子持壺は埴丘のほぼ全域で使用された可能性があり、またくびれ部では円鉢埴輪と同様の流れ落ち方を呈していたことからも、その使用方法が埴輪ときわめて近いものであったことが想定される。これは1988年に調査された团原古墳の状況からも明らかで、他の子持壺を出土する古墳の多くが埴丘やその埴器周辺から採取されることからも首肯されよう。

ところでこれらの子持壺の特徴からどのような編年的位置が与えられるであろうか。今回の調査では全形復元ができるものもなく、また必ずしも全個体が共通の特徴を持つわけではないので、微細な検討はできないが、大局的な位置付けを若干考えてみたい。

まずこの近くの松江市山代町团原古墳出土の子持壺と比較すると、团原古墳のそれは既に体部（覗壺）の胴の張りが少なくなるとともに、脚部の調整やおさめ方もかなり退化しており、本古墳出土のものが明らかに古相といえる。团原古墳からは山陰須恵器編年Ⅲ～Ⅳ期の須恵器が出土していることから、実年代としては6世紀末～7世紀初頭で大過ないと考えられる。

次にこの種の子持壺で古いものと考えられる鹿島町向山古墳、松江市法吉町岡山薬師古墳のそれと比較してみると、全体のプロポーションはいずれも体部がよく張り、脚部が次第に裾広がりになっていく点などは同様で、基本的に大差ない時期のようである。しかし細かく見ると、向山古墳のものは、子壺がより頸部に近い位置に付き、子壺口縁が他の2者より水平に近い形になっている上、脚部には細かく櫛描波状文を施すなど、若干古い要素が見受けられる。ちなみに、向山古墳は山陰須恵器編年Ⅲ期、岡山薬師古墳は6世紀中葉～後葉の時期が想定されている。

一方本墳からは、親壺の底がある脚付き子持壺が出土しており（第12図5,6）注目される。出雲地方の盛行期の子持壺は、親壺の底がないものが大部分で、同様の形態が他の地方にきわめて稀なことから「出雲型子持壺」と名づけられているが、その系譜については明らかではなかった。こうした脚付きの子持壺が、器台のうえに壺を乗せた形が変化して成立したものであるならば、丸底の壺に脚を取りつけたこの底のある個体が「出雲型子持壺」の祖形である可能性もある。そうであるならば、前に述べた編年観も若干さかのぼらせる必要があるかも知れない。

以上のようなことや、岡田山1号墳で見られるような脚の付かない子持壺が併存している可能性があることなど、山代二子塚古墳は子持壺のあり方や系譜、編年を探る上で重要な鍵を握るものであり、今後のさらなる調査が期待される。

（丹羽野 裕）

(3) 皮袋形土器

今回の出土遺物の中に数点の皮袋形土器片が含まれていたことは既に述べたとおりである。島根県下では、皮袋形土器がかかる同じ風土記の丘地内にある岩屋後古墳で出土したのに次いで2例目の発見となった。⁽¹⁰⁾

皮袋形土器は、円錐台形を偏平に押し潰して下端部を閉じ合わせた体部と、その上部に接合した口頭部からなる器形のもので（なかに両肩に把手を伴うことがある）、体部の片面に突帯、刻み目、竹管文が施されている。管見ではこの種のものには大きく二つのタイプがあるよう、突帯を有するものとそうでないものとが認められる。⁽¹¹⁾ 県下出土の2例についてみると、ほぼ完形品が出土した岩屋後古墳では、突帯を巡らしたうえで規則性にかける竹管文が施されており、タイプとしては前者に属するものである。一方、本古墳出土の破片には竹管文のみ認められて突帯がないが、小片であるためどちらのタイプになるかは今の段階では明らかにしがたい。ただ、外面調整や竹管文の施文の状態からすると、本古墳のものが岩屋後古墳のものに比べ、より丁寧である。

これまでのところ皮袋形土器について言及した文献は極めて少ない。田辺昭三氏は用途を「葬祭用」としたうえで、その消長期間は同氏が作成した須恵器年表中の「Ⅲ期の終末からⅣ期初頭」にかけた時期に比較的限定されるとしている。⁽¹²⁾ 今回の調査のまとめでは、本古墳の築造年代をこれまでの知見や他の出土遺物などから推しておよそ6世紀中葉前後と見なしたが、この年代観が皮袋形土器にも当てはまるとなると、田辺氏のそれと少し矛盾を来すことになろう。また、岩屋後古墳の場合でも、報告者は伴出した須恵器類を6世紀後半頃とみて、これらと皮袋形土器との間には大きな時期差はないものとしている。果たして田辺氏の皮袋形土器に関する年代観が妥当であるか否か、少し検討の余地（出現の時期を少し遡って考えてみてはどうか）がありそうである。

また、逆にこれが正しいとなれば、皮袋形土器の使用と現在想定している本古墳の築造年代との間には時間的なズレが生ずることになるが、この開きをどのように理解するかが問題となろう。その場合、皮袋形土器は古墳の築造後しばらくしてから葬祭用に供獻されたと考えることも可能となり、であれば本古墳における築造後の祭祀の存在といった面からも検討してみる必要があるように思われる。⁽¹³⁾

なお、現時点で中国地方における皮袋形土器の出土分布をみると、事例の意外と少ないことが知られる。⁽¹⁴⁾ すなわち、本県出雲地方の2例を除けば、岡山県下に2例（山陽町岩田第6号墳、岡山市津寺遺跡）、広島県下に1例（広島市惣田古墳）⁽¹⁵⁾ があるのみで、残る鳥取・山口両県下では今のところ皆無の状態である。このような状況からすると、皮袋形土器は葬祭用土器のなかでも稀な器種ということができるが、そうした中にあって出雲地方での出土数は今後増える可能性をもっているようにも思われ、今後この地方（特に東部地域）における皮袋形土器の出土を注目してみたいところである。

（鳥谷芳雄）

(4) 小 結

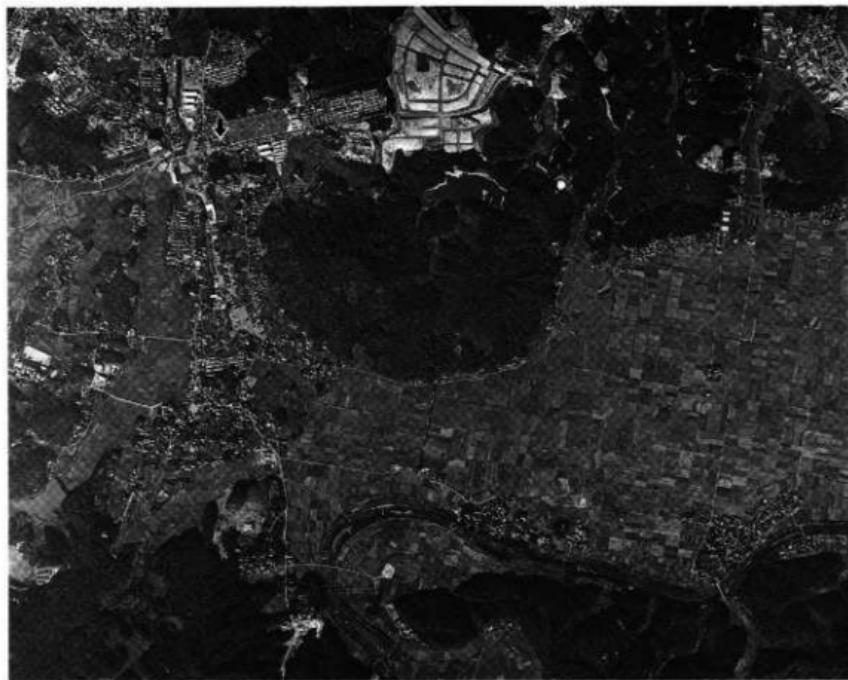
以上述べたような遺物の年代観から、古墳の築造時期について考えてみたい。埴輪、子持壺の型式からすると、およそ山陰須恵器編年Ⅱ期の須恵器を出土する古墳よりは新しく、Ⅲ期でも新相を示す須恵器を持つ古墳よりは古い、という位置づけが可能である。一方今回の調査で出土したその他の須恵器で、時期の判定がしる資料として坏身(第15図4)がある。小片で径は不正確としても、比較的長く立ち上がる口縁部の特徴から山陰須恵器編年ではⅢ期でも占相を示すもの(陶邑TK10併行か)といえる。もちろん須恵器が築造時のものかどうかは不明で、下限を示す資料と言えよう。

以上の点からみて、山代二子塚古墳の時期は山陰須恵器編年のⅡ期新～Ⅲ期古段階とみて大過ないものと考えられる。あえて実年代を言えば、6世紀中葉を前後する時期であろうか。

(鳥谷芳雄・丹羽野 裕・渡辺貞幸)

註

- (1) 井上寛光「出雲の円筒埴輪」『松江考古』5 1983
- (2) 島根県教育委員会『古曾志遺跡群発掘調査報告書』1989
- (3) 長嶺康典・昌子寛光「円筒埴輪の検討」『出雲岡田山古墳』島根県教育委員会 1987
- (4) 渡辺貞幸「松江市山代二子塚古墳をめぐる諸問題」『山陰文化研究紀要』23 1983
- (5) 島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告』Ⅵ 1989
- (6) 鹿島町教育委員会『謀武地区遺跡分布調査報告書』2 1988
- (7) 島根県教育委員会『岡田叢鏡古墳』1986
- (8) 昌子寛光「出雲の子持壺」『古文化叢叢』18 1987
- (9) 岸本雅敏「装飾付須恵器と首長蓋」『考古学研究』85 1975
- (10) 横山純夫ほか『岩屋後古墳発掘調査概報』島根県教育委員会 1978
- (11) この二つのタイプは、前者にも後者にも共通して、さらに刻み目のあるものと竹管文のあるものとに二分できそうである。
- (12) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981。なお、氏はこの形態のものを皮袋形瓶と呼んでいる。
- (13) この時期は、年表では陶邑窯のTK-209から同-217期に該当し、実年代で言えば7世紀初頭(6世紀末を含む)から同前葉にかけての頃に相当するものとみられる。
- (14) この点は、今後子持壺など本古墳に伴うと思われる採集・出土遺物のすべてについてトータルに検討されるべき課題であろう。
- (15) 神原英朗ほか『岡山県宮山陽新住宅街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査報告』、岩田古墳群 岡山県山陽町教育委員会 1976。椿 真治氏の教示による。
- (16) 岡山県教育委員会が実施した山陽自動車道関連発掘調査より出土、未報告。津寺遺跡は集落跡で、出土した皮袋形土器は土師器、6世紀終わり頃の土器が伴出しているという。椿 真治氏の教示による。
- (17) 福井万千「広島市惣田古墳出土の皮袋形土器」『みよし風土記の丘』No.5 みよし風土記の丘友の会 1981。妹尾周三氏の教示による。なお、福井氏はこの土器の時期について7世紀前半頃のものと推定されているが、妹尾氏によると6世紀後半頃の可能性があるという。
- (18) ちなみに、田辺氏の先の文献には皮袋形土器について「特殊な器形の須恵器の中では最も広い分布範囲をもち、その量も多い。分布範囲は東海以西の西日本全域に及ぶ」との記述がみられる。



八雲立つ風土記の丘空中写真(矢印:山代二子塚古墳)



山代二子塚古墳(東南上空から)

図版2



1 トレンチ(北から)



1 トレンチ(南から)



3 トレンチ(西から)

1 トレンチ西壁
周溝内土層堆積状況



2 トレンチ(北から)



3 トレンチ南壁
周溝内土層堆積状況



図版 4



4 トレンチ(西から)
周溝東側立ち上がり



4 トレンチ(南から)
墳丘立ち上りと西壁土層



4 トレンチ(南から)
最奥部 周溝北側立ち上り

くびれ部トレンチ
(5トレンチ)
スロープ状盛土検出状況



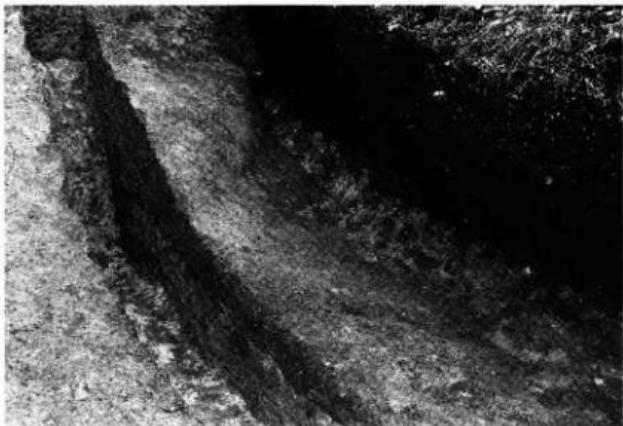
くびれ部トレンチ東壁
土層断面



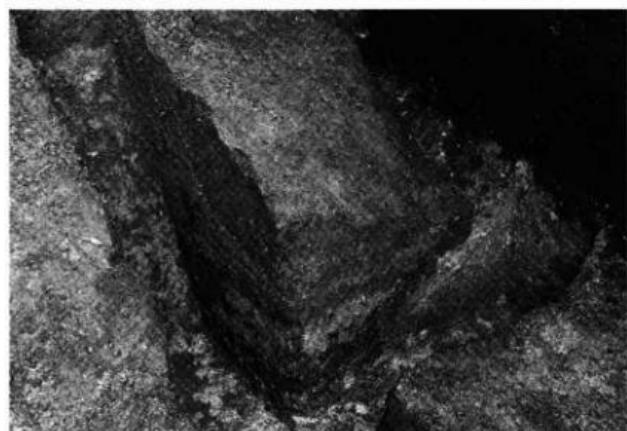
くびれ部トレンチ南壁
土層断面



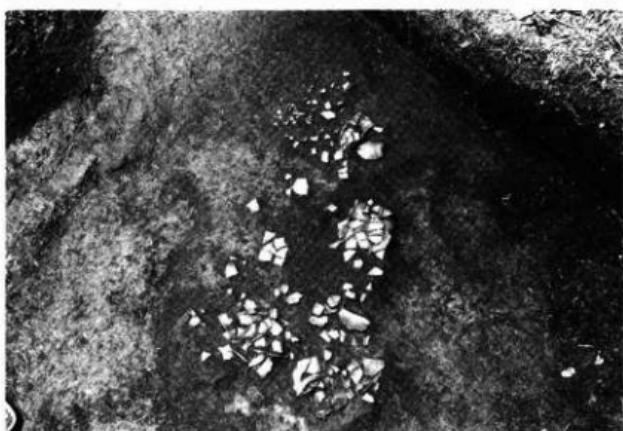
図版 8



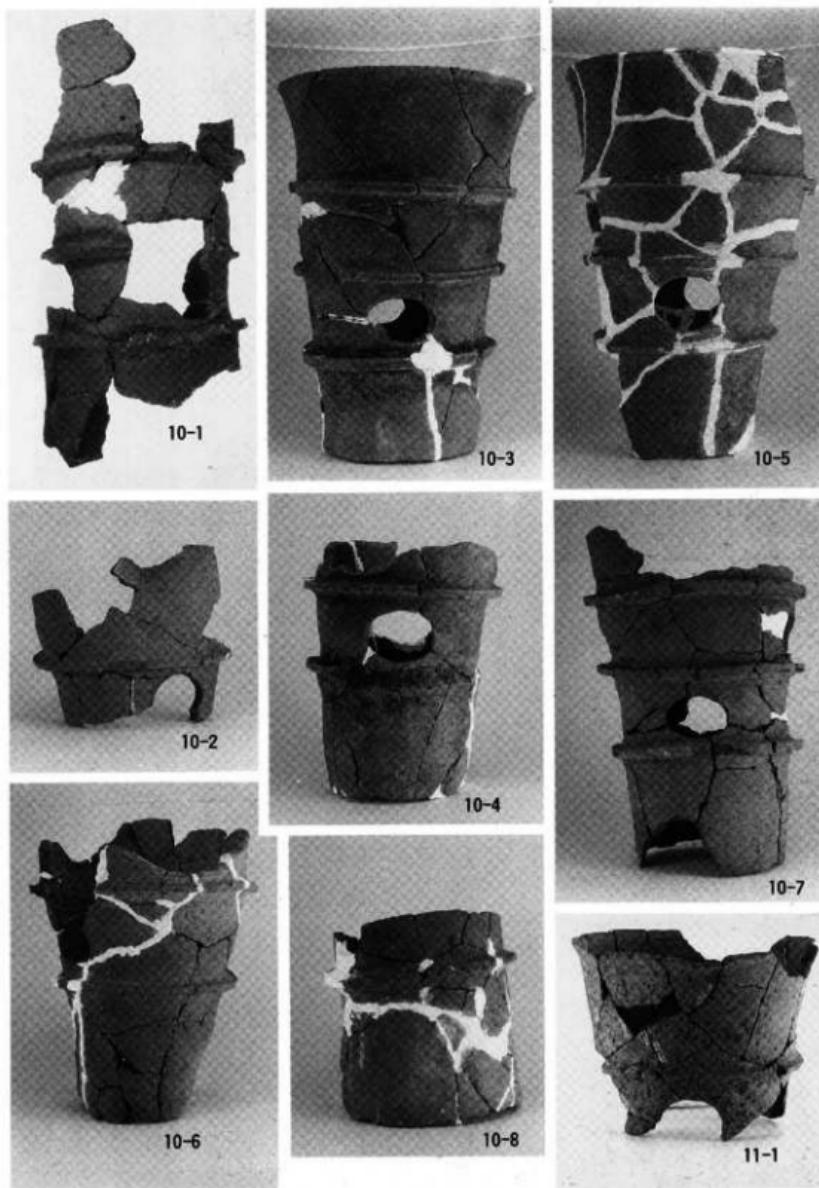
くびれ部トレンチ
(5トレンチ)
スロープ状盛土 土層断面
(1サブトレンチ南壁)



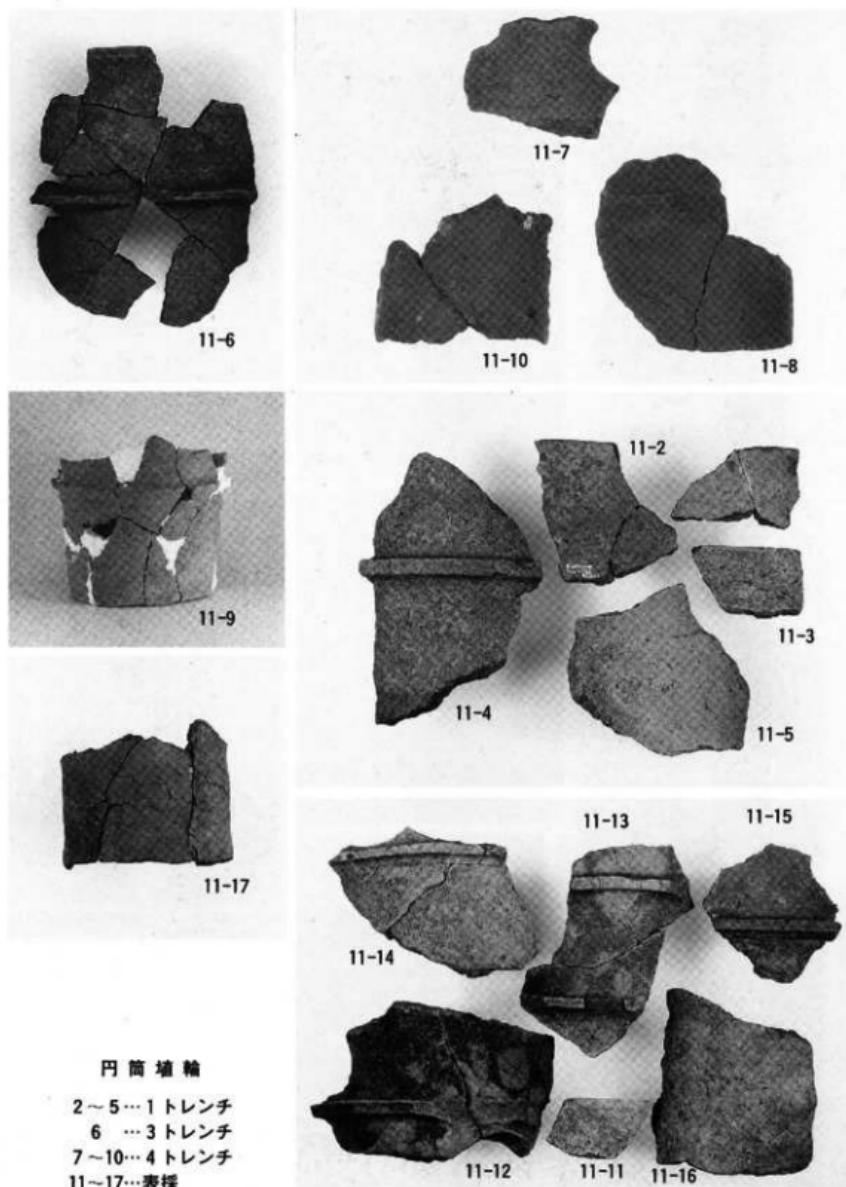
くびれ部トレンチ
填丘盛土とスロープ状盛土
(2サブトレンチ東壁)

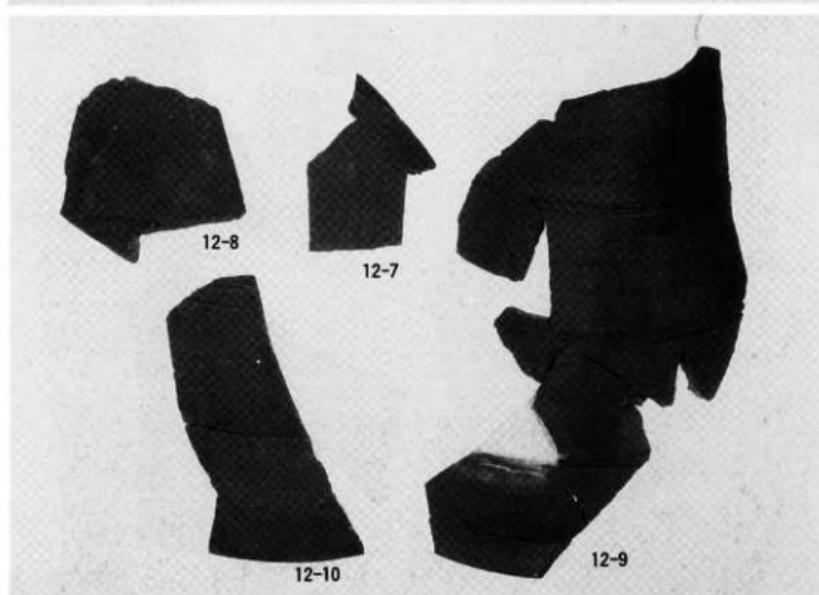
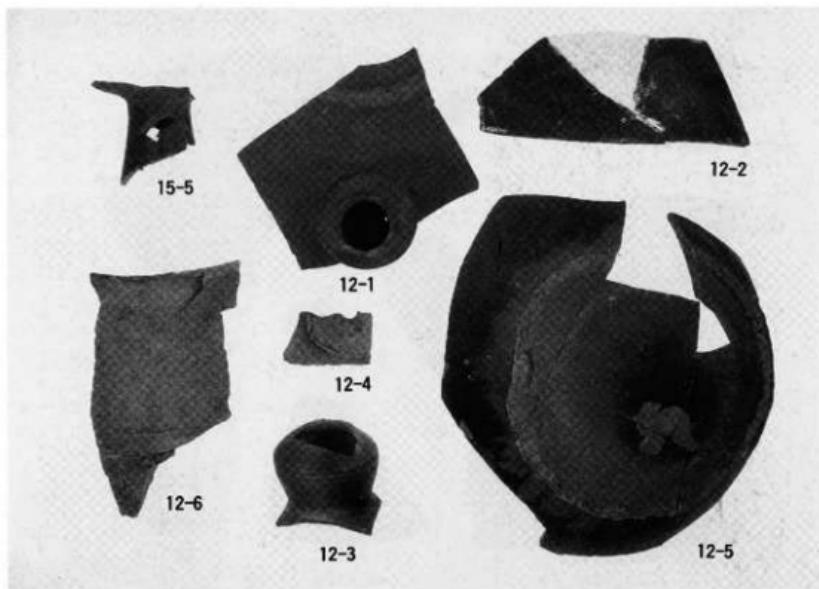


くびれ部トレンチ
スロープ状盛土上遺物出土
状況

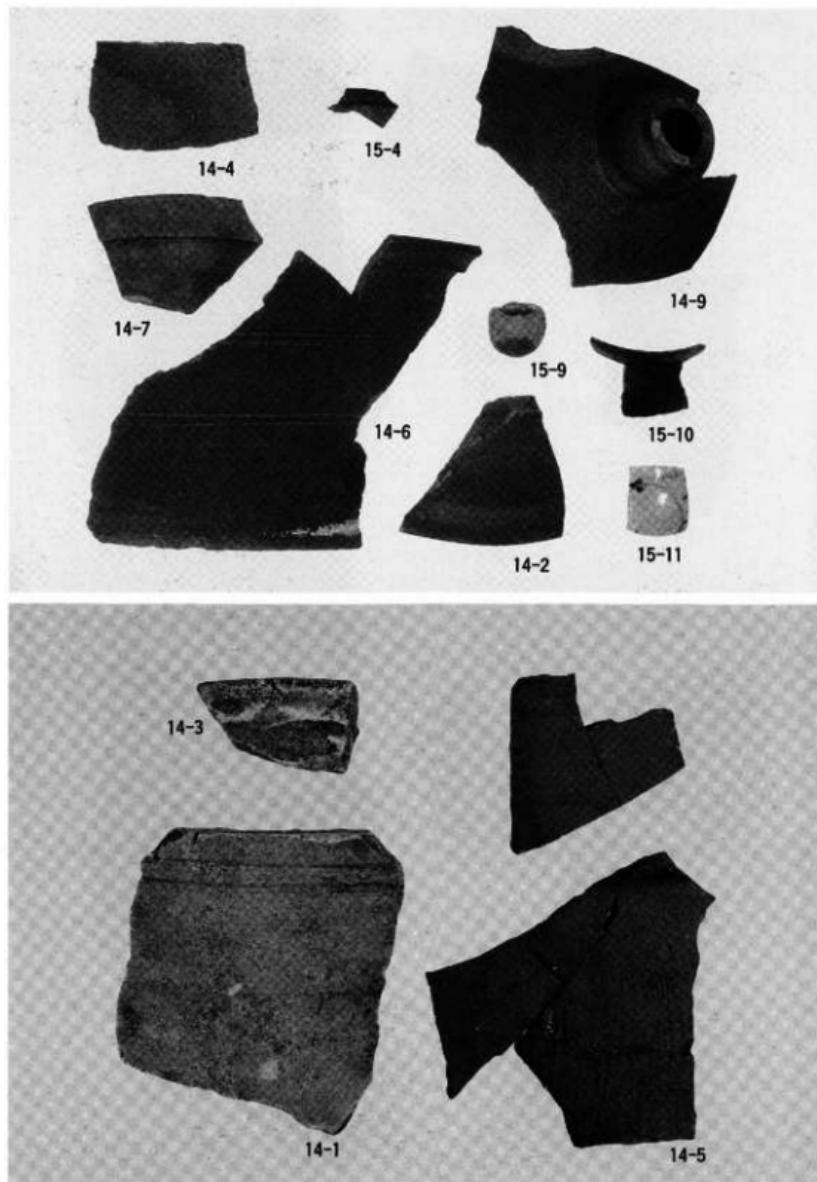


円筒埴輪 1~8…くびれ部トレンチ 11-1… 1トレンチ

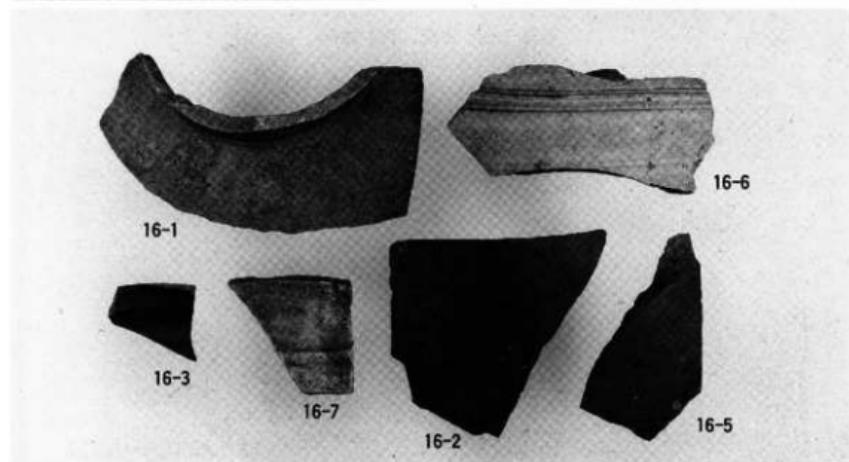
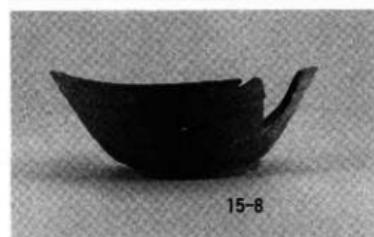
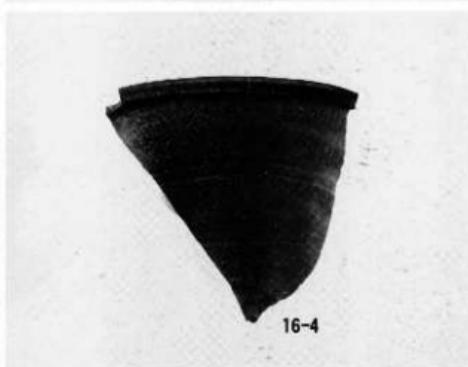
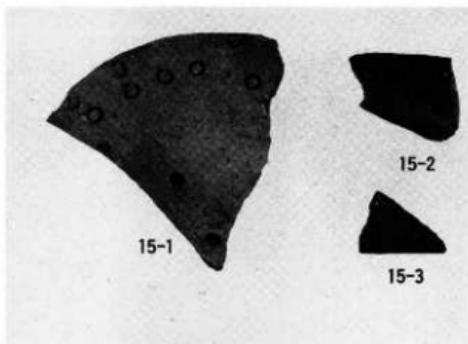
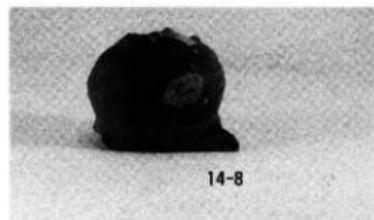




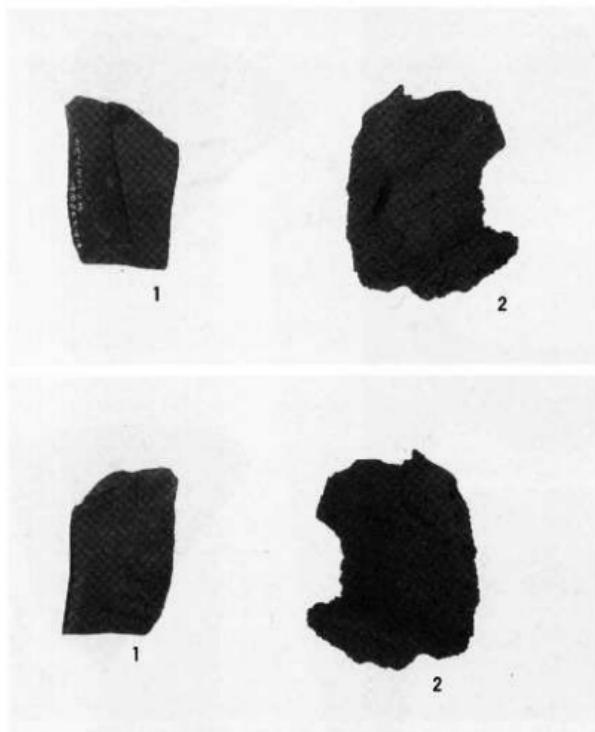
くびれ部トレンチ出土須恵器



1 ~ 6 トレンチ出土遺物



3～5 トレンチ出土、表採須恵器



石器（上段 背面、下段 腹面）

1992年3月20日 印刷
1992年3月30日 発行

風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書
——山代二子塚古墳——

編集・発行 島根県教育委員会
松江市殿町1番地
印刷・製本 有限会社 谷口印刷
松江市母衣町89番地

縮尺 1:500

墳古墳二子代山



島根県教育委員会
島根大学法文学部考古学研究室



ワールド航測コンサルタント株式会社調製

B1
A

- A. 1. 昭和55年2月～昭和56年7月 1:100 島根大学考古学研究室測量
2. 昭和57年7月 航空写真測量図、その他による成果を基底縮小トレイス
B. 1 平成2年8月 1:200 島根県教育委員会測量
2. 平成3年12月 1:200 実測図を縮小トレイス

等高線間隔 0.50m
座標系 地図系

1 : 500

50m